

熊本県文化財調査報告 第67集

肥後国分僧寺跡Ⅱ

昭和58年度熊本都市計画事業水前寺地区画整理事業、水前寺住環境整備モデル事業及び国庫補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1983

熊本県教育委員会

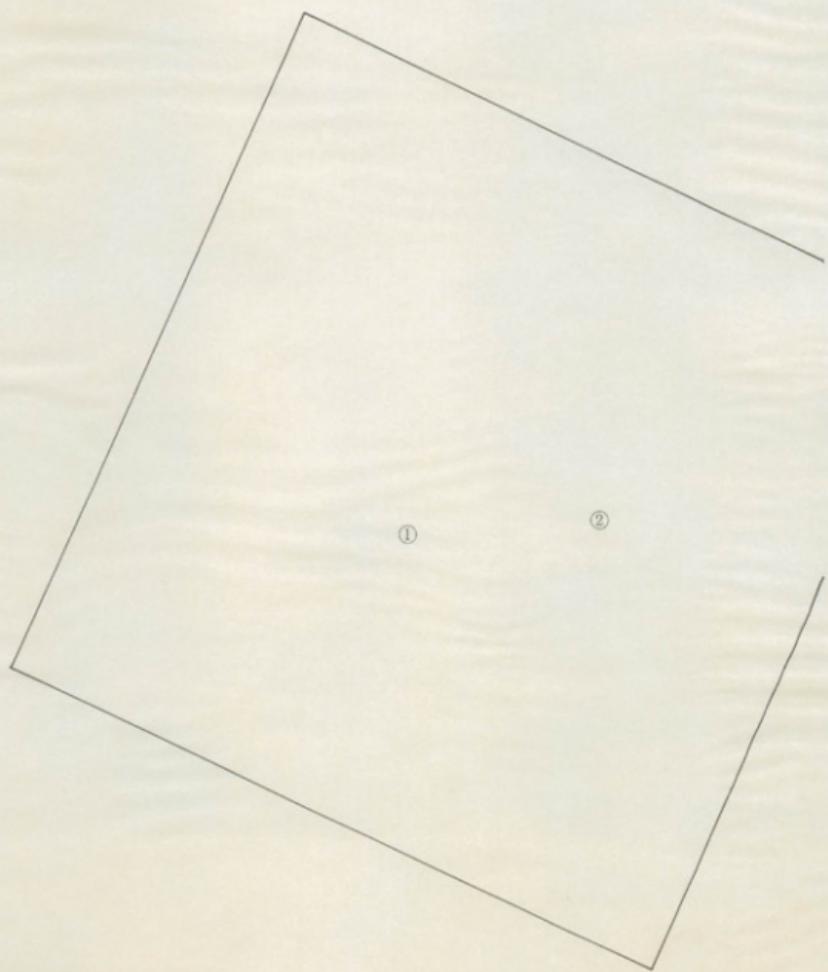
熊本県文化財調査報告 第67集

肥後国分僧寺跡Ⅱ

昭和58年度熊本都市計画事業水前寺土地区画整理事業、水前寺住環境整備モデル事業及び国庫補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1983

熊本県教育委員会



肥後国分僧寺 上空写真 ①曹洞宗国分寺 ②熊野宮 線内は松本雅明氏推定寺域



序 文

熊本県教育委員会では、熊本都市計画事業水前寺土地区画整理事業、水前寺住環境整備モデル事業及び国庫補助事業に伴う埋蔵文化財調査として、熊本市出水1丁目に所在する肥後國分僧寺遺跡の第3次調査を実施しました。

この調査では、中世から近世の遺構を確認することができましたので、ここに全容を報告するものであります。

この報告書が文化財保護に対する認識を高め、学術上の一助となれば幸いです。

調査を実施するにあたり、県土木部計画課・住宅課・県水前寺土地区画整理事務所をはじめ、地元の方々から御協力を賜わりました。ここに厚く御礼を申し上げます。

昭和59年3月31日

熊本県教育長 外 村 次 郎

例　　言

1. 本書は昭和58年度に熊本県教育委員会が実施した、熊本都市計画事業水前寺地区画整理事業（県土木部計画課・県水前寺地区画整理事務所）、水前寺住環境整備モデル事業（県住宅課）、国庫補助事業（国分寺跡発掘調査）に伴う埋蔵文化財発掘の報告書である。
2. 本書の執筆には、橋本康夫（I、II、III、IV-2、4、V）と西林一弘（IV-1.3.5、V）があたったが、出土した人骨は産業医科大学北條輝幸教授に鑑定をお願いするとともに、玉稿をいただいた。
3. 出土遺物の実測は橋本、西林があたったが、掲載の実測図の作製及び図説には吉村宏康、山内義久、現場での実測には新改孝子、島津陽子、岩崎さゆり、柳唯一、吉村、山内の諸氏の協力を得た。
4. 遺構写真的撮影は橋本、西林があたり、遺物写真は渡辺正一氏が担当した。
5. 調査中、県文化課職員各氏の指導・助言をいただいた。終了後、九州歴史資料館技師森田勉、倉住清彦、高橋章、県文化課松本健郎、絹方勉、平岡勝昭、田尻悦子の諸氏より多くの教示を賜わった。
6. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行ない橋本、西林が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 序説	1
1. 発掘調査に至るまで	1
2. 調査のための組織	1
第Ⅱ章 調査の概要	3
1. 調査地域	3
2. 発掘調査日誌抄	3
3. 第2・第3調査区グリッド設定と名称	6
4. 昭和58年度肥後国分僧寺遺跡の層位・層序	7
第Ⅲ章 検出遺構	8
1. 第1調査区（溝遺構）	8
(1) 熊本市出水1丁目148番地	8
(2) タ タ 147番地	8
(3) タ タ 146番地	13
2. 第2調査区（溝・墓塚・竪穴遺構）	13
(1) モデル住宅区画整理道路建設予定地北側（熊本市出水1丁目320・327番地）	
(2) タ 南側（熊本市出水1丁目293・294・295・296・302—2番地）	
i) 溝I	13
ii) 溝II・III・IV・VI	19
iii) 溝V・VII・VIII	19
iv) 近世の土塙墓	20
v) その他の遺構	21
(3) 熊本市出水1丁目302—4番地	21
3. 第3調査区	24
(1) 熊本市出水1丁目313・314・315番地	24
第Ⅳ章 遺物	25
1. 瓦類	25
(1) 平瓦	25
(2) 丸瓦	29
(3) 肋斗瓦	29
(4) 面戸瓦	29

(5) 軒丸瓦	29
(6) 軒平瓦	38
2. 土師器	42
(1) 坯	42
(2) 盆	44
(3) 高台付碗	46
(4) 高坏	46
(5) 壺	47
(6) 把手	48
(7) 墨書き土器	48
3. 須恵器	49
(1) 坯蓋	49
(2) 坯	50
(3) 盤	50
(4) 高台付碗	50
(5) 高坏	52
(6) 瓢	53
(7) 壺	53
(8) 蓋	53
4. 青磁	53
5. 瓦質土器	53
6. 土器観察一覧表	56
第V章 まとめ	68
付論	
1. 国分寺跡出土人骨	69

産業医科大学第一解剖学教授 北條 順幸

挿 図 目 次

第1図	昭和58年度肥後國分僧寺遺跡調査地（地番）	2
第2図	肥後國分僧寺遺跡第2・第3調査区グリッド設定図	6
第3図	肥後國分僧寺遺跡標準土層断面図	7
第4図	第1調査区土層断面図	10
第5図	昭和58年度肥後國分僧寺遺跡調査地区平面実測図	12
第6図	第2調査区試掘溝南壁土層断面図	14
第7図	第2調査区平面実測図	15
第8図	第2調査区住宅隣敷地内土層断面図・遺構断面図	17
第9図	第2調査区溝V西壁土層断面図	19
第10図	第2調査区溝VI西壁土層断面図	19
第11図	第2調査区溝VII東壁土層断面図	20
第12図	第2調査区近世の土塙墓実測図	20
第13図	第2調査区土塙実測図	21
第14図	第2調査区堅穴遺構実測図	22
第15図	第2調査区西本宅敷地北壁土層断面図	23
第16図	第3調査区北壁土層断面図	24
第17図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土平瓦（繩目）実測図	26
第18図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土平瓦（格子目）実測図	27
第19図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土平瓦（木ノ葉状文様）実測図	28
第20図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土丸瓦—1実測図	30
第21図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土丸瓦—2実測図	31
第22図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土駁斗瓦実測図	32
第23図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土面戸瓦実測図	33
第24図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土軒丸瓦実測図（1）	35
第25図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土軒丸瓦実測図（2）	36
第26図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土軒丸瓦実測図（3）	37
第27図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土軒丸瓦実測図（4）	38
第28図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土軒平瓦実測図（1）	39
第29図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土軒平瓦実測図（2）	40
第30図	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土軒平瓦実測図（3）	41

第31図 土師器実測図(1)	43
第32図 土師器実測図(2)	45
第33図 土師器実測図(3)	47
第34図 土師器実測図(4)	48
第35図 墨書き土器実測図	49
第36図 須恵器実測図(1)	51
第37図 須恵器実測図(2)	52
第38図 須恵器実測図(3)	54
第39図 青磁・瓦質土器実測図	55

表 目 次

第1表 土器観察一覧表(土師器)	56
第2表 土器観察一覧表(土師器)	57
第3表 土器観察一覧表(土師器)	58
第4表 土器観察一覧表(土師器)	59
第5表 土器観察一覧表(土師器)	60
第6表 土器観察一覧表(土師器)	61
第7表 土器観察一覧表(土師器)	62
第8表 土器観察一覧表(土師器)	63
第9表 土器観察一覧表(須恵器)	64
第10表 土器観察一覧表(須恵器)	65
第11表 土器観察一覧表(須恵器)	66
第12表 土器観察一覧表(須恵器・青磁・瓦質)	67

図 版 目 次

図版 1	肥後國分僧寺上空写真	1
図版 2	第3次肥後國分僧寺発掘調査第1調査区土層写真	2
図版 3	第3次肥後國分僧寺発掘調査第2・第3調査区	3
図版 4	第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区溝I・II土層写真	4
図版 5	第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区(1)	5
図版 6	第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区(2)	6
図版 7	第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区溝V・VI・VII	7
図版 8	第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区溝V・VI・VII土層写真	8
図版 9	第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区検出遺構	9
図版10	墨書き土器	10
図版11	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土瓦	11
図版12	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土文様軒丸瓦	12
図版13	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土文様軒平瓦	13
図版14	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土土師器	14
図版15	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土須恵器	15
図版16	第3次肥後國分僧寺発掘調査出土須恵器・瓦質土器	16

第Ⅰ章 序 説

1. 発掘調査に至るまで

今回の発掘調査は、昭和56年・57年に続く第3次の調査である。調査地の大部分は、松本雅明氏推定の肥後國分僧寺寺域内の北東部にあたり、第1次・第2次調査と同様に県土木部計画課、県水前寺地区画整理事務所、新たに県土木部住宅課より発掘調査の依頼を受け、更には国庫補助事業として、家屋移転による空地が出来るたびに発掘調査を実施した。調査区の対象面積は1,630m²で、昭和58年5月11日より調査を開始した。

2. 調査のための組織

調査責任者 米村 嘉人 文化課課長

岩崎 卓喜 前文化課課長

調査総括 隈 昭志 主幹兼文化財調査係長

調査担当者 橋本 康夫 技師

西林 一弘 臨時職員

調査事務局 林田 茂一 課長補佐 石島 和光 住宅課課長

大塚 正信 主幹兼経理係長 大谷 隆俊 前住宅課課長

花田 隆二 参事 永田 英雄 計画課課長

松崎 厚生 前参事 山田 重輝 水前寺地区画整理事務所所長

西沢 八郎 技師 田尻 照雄 前水前寺地区画整理事務所所長

谷 喜美子 主事

調査期間中は下記の機関より調査協力をいただいた。記して謝意を表する。

熊本県土木部計画課

熊本県土木部住宅課

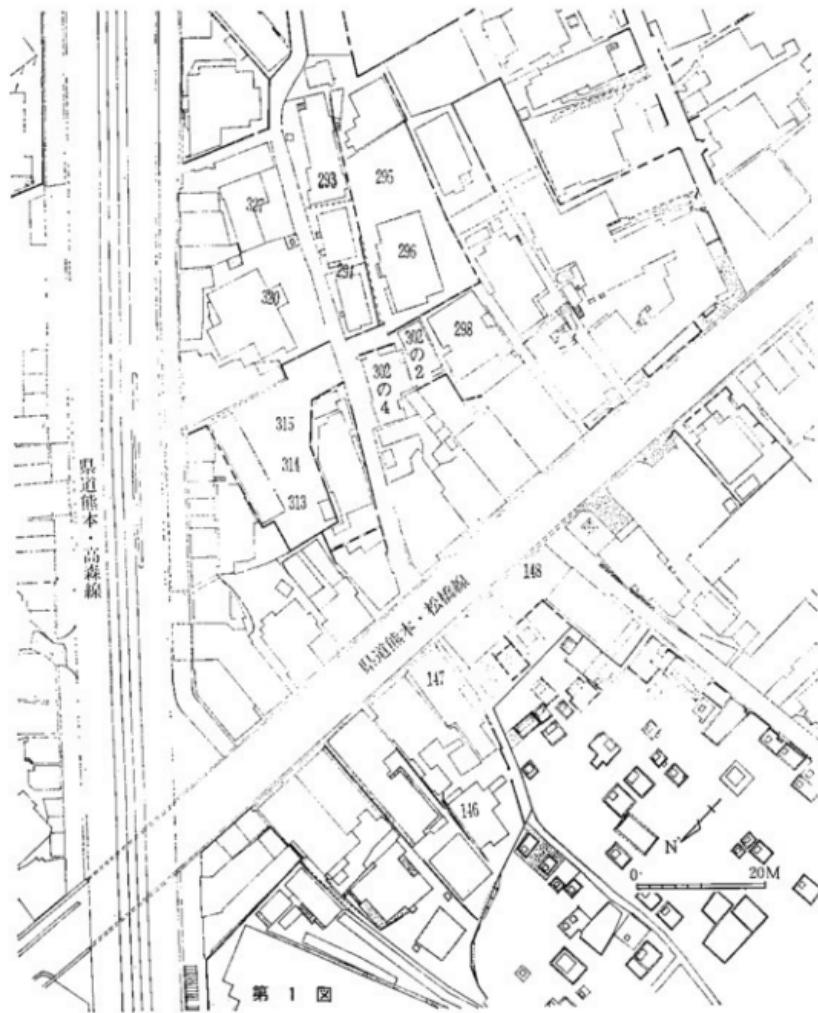
熊本県水前寺地区画整理事務所

熊本県警察本部警務部警務課航空隊

熊本市教育委員会文化課

土地地権者各位

清水建設株式会社



第1図 昭和58年度 肥後国分寺遺跡調査地(地番) (地図は区画整理事業着工前のものを使用)

第1調査区 熊本市出水1丁目148・147番地(県水前寺地区画)

熊本市出水1丁目146番地（民地）

第2調査区 熊本市出水1丁目302-2、293、295、296、298番地（県水前寺土地区画）

熊本市出水1丁目302-2、294、296、320、327番地（県住宅課）

熊本市出水1丁目302-2、302-4番地(民地)

第3調査区 熊本市出水1丁目313、314、315番地（民地）

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査地域

調査地は南北に走る県道熊本・松橋線（都市計画街路水前寺・画図線）と、東西に走る県道熊本・高森線（同新市街・水前寺線）に挟まれた交通雑多な市街地の一角で、一般住家及び商店が軒を並べる商業地域である。

県土木部計画課・県水前寺土地区画整理事務所依頼の調査地は、熊本県熊本市出水1丁目146・147・148・293・295・296・298番地。住宅課は294・296・320・327番地。国庫補助対象地は146・302・313・314・315番地である。尚、調査地の地理的関係上から調査区を大きく3地区に別け、第1調査区は146・147・148番地、第2調査区は293・294・295・296・298・302・320・327番地、第3調査区は313・314・315番地とした。

国土地理院の地図2万5千分の1「熊本」にその位置を求むれば、北より21.0cm、東より5.7cmの交点にあたり、標高は海拔10m前後である。

調査地は区画整理終了後、道路・モデル住宅・民家となる予定である。尚、調査の基点は中田豆腐店北側で交わる、南北と東西に伸びた道路側溝の内側交点を使用した。

2. 発掘調査日誌抄

第3次発掘調査（昭和58年5月11日～12月16日）

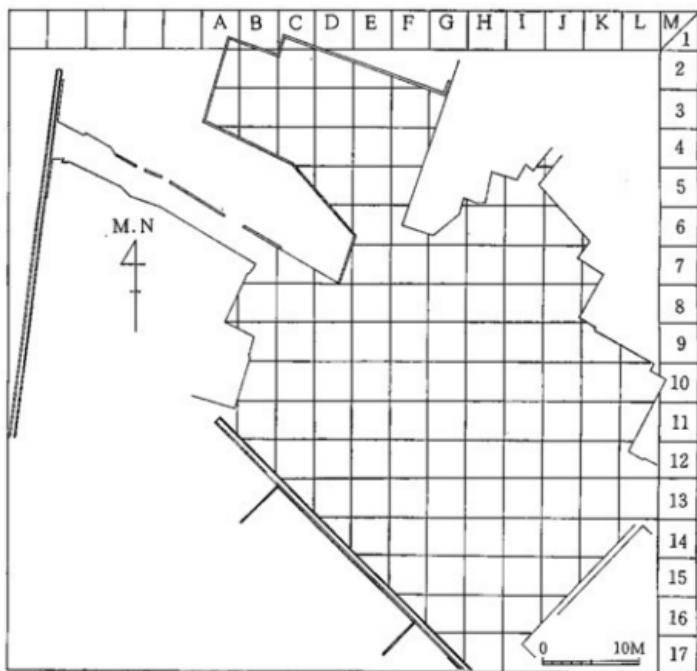
- 5月11日 機材搬入、第2調査区内のモデル住宅敷地（出水1丁目293番地）道路敷地（294番地）内に2ヶ所の試掘溝を設定し、第3次発掘調査を開始する。
- 5月17日 重機導入（ユンボ）1日目
第2調査区モデル住宅敷地（320番地）内の表土層除去
- 18日 2日目 第2調査区道路敷地（298、302-2番地）民地敷地（302-2、4番地）モデル住宅敷地（302-2番地）内の表土層除去
- 19日 3日目 第2調査区モデル住宅敷地（294番地）、道路敷地（293番地）内に試掘溝設定
- 20日 第2調査区294、293番地の土層断面実測
- 23～26日 第2調査区民地敷地（302-2、4番地）内の調査

- 27日 第2調査区道路敷地(302—2番地)内から幅約1.5mの東西に伸びる溝Ⅶ検出
- 31日 第2調査区モデル住宅敷地(302—2番地)内から人骨出土
- 6月1日 第2調査区道路敷地(302—2番地)県住宅課敷地(302—2番地)内の東西溝(Ⅵ)埋土掘り調査、布目瓦が多量に出土
- 2日 第2調査区道路敷地(302—2番地)県住宅課敷地(302—2番地)内の東西溝(Ⅵ)埋土掘り調査 人骨の実側
- 7日 第2調査区道路敷地(302—2番地)県住宅課敷地(302—2番地)内の東西溝(Ⅶ)埋土掘り調査 人骨の取り上げ作業 平板実側
- 10日 第2調査区302—2、4番地の調査完了
東西溝Ⅶの完掘、清掃後写真撮影
- 13～17日 第2調査区302—2、4番地の埋め戻し作業
- 21日 重機導入(ユンボ)
第3調査区 民地(313、314、315番地)内の表土層除去
- 23日 第3調査区 民地(313、314、315番地)内の土層断面実測、写真撮影後埋め戻す
- 27日 プレハブ小屋建設
- 6月29日～ 出土遺物(布目瓦、土師器、須恵器)の整理及び水洗い
- 7月15日
- 7月18～21日 第1調査区 道路敷地(148、147番地)民地(146番地)の平板実測
- 22～31日 第1調査区 147番地の家解体中に付作業中止
- 8月1日～2日 第1調査区 民地(146番地)の調査 南北に落ち込む溝状遺構検出
- 4～8日 重機導入(ユンボ)
第1調査区 道路敷地(147番地)の調査
- 9日 重機導入(ブルドーザー)
第1調査区 道路敷地(147番地)内の埋め戻し
- 10～11日 第1調査区 民地(146番地)道路敷地(147番地)内出土遺物の整理及び水洗い
- 12～15日 益休み
- 16～26日 出土遺物(瓦、土器類)への注記作業
- 29～31日 特休(夏休)で作業休み
- 9月1～2日 出土遺物(瓦、土器類)への注記作業
- 5日 重機導入(ユンボ)
第2調査区 モデル住宅敷地(327番地)の表土層除去
- 7日 第2調査区 モデル住宅敷地(327番地)の清掃後写真撮影

- 8～12日 第2調査区 モデル住宅敷地(327番地)の平板実測($\frac{1}{40}$ 、 $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{200}$)
- 13日 重機導入(ニンボ) 1日目 第2調査区モデル住宅敷地(294、296番地)道路敷地(293、295番地)内の表土層除去 旧林田宅玄関前(294番地)と西端(296番地)(巾6m、長18m)、南端(296番地)(巾6m、長20m)を除く
- 14日 重機導入(ニンボ) 2日目 第2調査区 モデル住宅敷地内の現道路下(294番地先)で東西に伸びる溝(溝I)検出
- 16～20日 第2調査区 モデル住宅敷地と道路敷地内より数本の溝(I、II、III、IV、V、VI)と土塁・pit検出
- 22日 第2調査区 溝Ⅲ内より井茶碗出土
- 27・28日 台風接近のため作業中止
- 30日 第2調査区 本日までの調査で計6本の溝が検出
- 10月3日 第2調査区 溝Iの埋土内より「富貴長春」と記された茶碗片出土
- 4～6日 第2調査区 溝I・VIの調査 平板実測 $\frac{1}{40}$ 、 $\frac{1}{100}$
- 10月7日 第2調査区内の清掃、写真撮影
- 12日 第2調査区 溝II、IIIの調査 底面より近世染付茶碗片出土
- 13日 第2調査区 重機(ブルドーザー)で320、327、293、295番地内に民地(313、314、315番地)への進入路を造成
- 17日 重機導入(ニンボ)
- 第2調査区 294、296番地内に残っていた未発掘の表土層除去
- 18日 第2調査区 新たに296番地内で1本の溝(VII)検出
- 20～24日 第2調査区 溝(I、VI、VII)、pitの調査、土層断面実測
- 25～27日 第2調査区 溝(II、V、VII)の調査、土層断面実測、平板実測($\frac{1}{100}$)
- 28～30日 第2調査区 溝(I、II)の調査 土層断面実測、平板実測($\frac{1}{40}$)
- 11月1～4日 第2調査区 調査区の平板実測($\frac{1}{40}$)
- 5～9日 出土遺物の整理及び水洗い
- 10～11日 重機導入(ブルドーザー)
- 発掘調査区の埋め戻し作業
- 12～25日 出土遺物の整理及び注記
- 28日 出土遺物を県文化課収蔵庫へ(約4.2t)
- 12月13日 第1調査区 道路敷地(148番地)の調査
- ～15日 第1調査区 土層断面実測、清掃後写真撮影 機材撤収
- 16日 調査終了

3. 第2・第3調査区のグリッド設定と名称

第2・第3調査区の表土剥ぎ後、磁石による南北線を基本とした4m×4mを1グリッドの単位として、東西をA～M、南北を1～17に割りつけていった。その結果、調査区内に140ヶ所のグリッドを設定した。



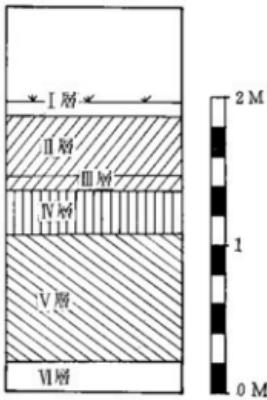
第2図 肥後国分僧寺跡第2・第3調査区 グリッド設定図

4. 昭和58年度肥後国分僧寺遺跡の層位・層序

調査地一帯は、現在交通雑多な市街地の一角であるが、戦前は一部民家を除いては畠地であった場所である。現県道熊本・高森線は、軍用道路として開発・開通したものであるが、その際今年度の調査地の一部も開発の余波を受けている。しかし、大部分は戦後の住宅化の波で、地山の面まで削平又は搅乱されていた。そこで調査の結果を元に、調査地の層位・層序の概略図をつくり、第3図に示す。

I層は表土で0.1~0.3m前後の厚さである。調査地点によっては砂利・壁土・盛土等の客土層がI層上にある。II層は暗褐色土で約0.3~0.6mの厚さで、粒の小さい軟弱な土である。この層はすでに耕作及び搅乱を受けた層である。III層は層厚約0.8mでII層と同色であるが固く締っており、第1調査区内の一部にしかなく、大部分はすでに削平又は搅乱されていた。尚、第1調査区では、この面から遺構が検出されている。

IV層は地山の明黄褐色土である。V層は固く締った緑灰色土で、第2調査区の遺構はIV層、V層面で検出されている。VI層は砂質の暗褐色土で、溝Ⅰの低面はこの層内まで掘り込まれている。



第3図 肥後国分僧寺遺跡
標準土層断面図

第Ⅲ章 検出遺構

本調査で検出された遺構には、溝遺構9本、墓塚2基、竪穴遺構1基がある。いずれも中世～近世の遺構で、国分寺に直接関係する遺構は検出できなかった。

1. 第1調査区

本調査区からは、溝状遺構1本が検出された。溝状遺構は、戦前に作成された字図や地元の話等から判断して、明治～大正時代頃に埋められた近世の溝と考えられる。

(1) 出水1丁目148番地

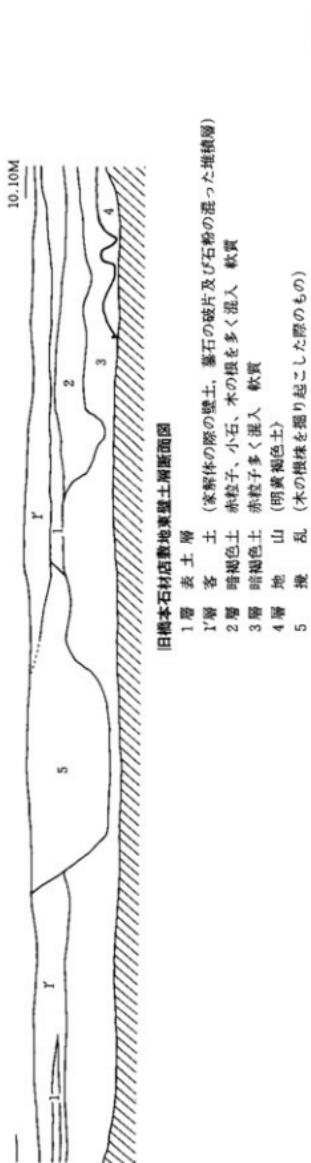
調査地は、橋本石材店前の区画整理事業に伴う道路拡張部分である。同所は、長年橋本石材店の工事場として使用されていた所である。今回、新たに道路側溝が埋設されることになり、そこで工事開始前に調査を行う事にした。

調査地は東西に幅4m、南北に長さ15mで、東側を県道熊本・松橋線（都市計画街路水前寺・画図線）が走り、西側は新築なった橋本石材店の店先である。調査は幅3m、長さ15mの試掘溝を設定し、調査に着手した。その結果、現表土層・1'層は、墓石の破片及び石粉と石材店解体の際の客土が混った層で、その下に厚さ約0.1～0.2m程の旧表土層・1層がある。1層を除去すると、すぐに軟弱で砂質の暗褐色土層・2層があり、2層内からは数点の布目瓦小片と共に近世陶器片が出土している。石材店店先の建物南端より約3m北へ行った地点で、地表下約1.2m、2層より0.2m下で明黄褐色土層・3層が検出された。⁽¹⁾ 3層は南→北に落ち込んでおり、地元の話、戦前に作成された字図を元に判断すれば、江戸～大正期頃の溝の南端部分と考えられる。尚、調査は同所が交通雑多な場所であり、商店の店先、軟弱な土質といった諸々の悪条件から、溝の東西端と3層の北側部分の延長線を確認する事が出来なかった。

(2) 出水1丁目147番地

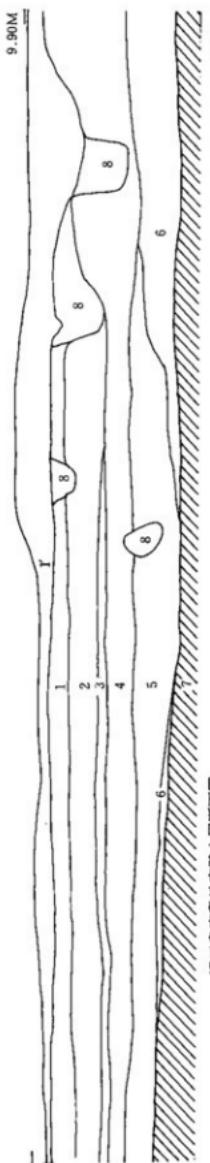
調査地は、旧三島造花店敷地跡である。区画整理事業に伴い、同所に墓地への進入路として道路を通す事になった。調査は、同家が解体された8月初旬に行った。

調査地は幅4m、長さ20mで、南側に新築工事中の三島造花店、北側はさがら屋である。同所に幅2m、長さ18mの調査区を設定し、調査した。その結果、厚さ約0.3mの表土層・1層上に、同家解体の際の客土・1'層が0.1～0.5m程堆積していた。1層下は、厚さ約0.6m程の暗褐色で小石を多く含む軟弱な土層・2層がある。2層は同所一帯が低かったので、10数年前

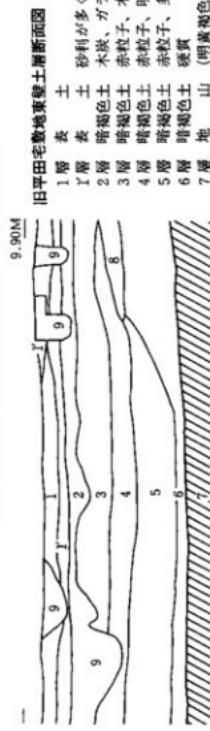


日橋本石材店敷地東壁土層断面図

1層	表土層 客土	土 (家畜糞体の際の堆土、礫石の破片及び石粉の混った地耕層)
1'層	脛骨	土
2層	暗褐色土	赤粘土、小石、木の根を多く混入 軟質
3層	暗褐色土	赤粘土多く混入 軟質
4層	山土	山土 (明黄褐色土)
5層	地	土 (木の根株を掘り起した層のもの)

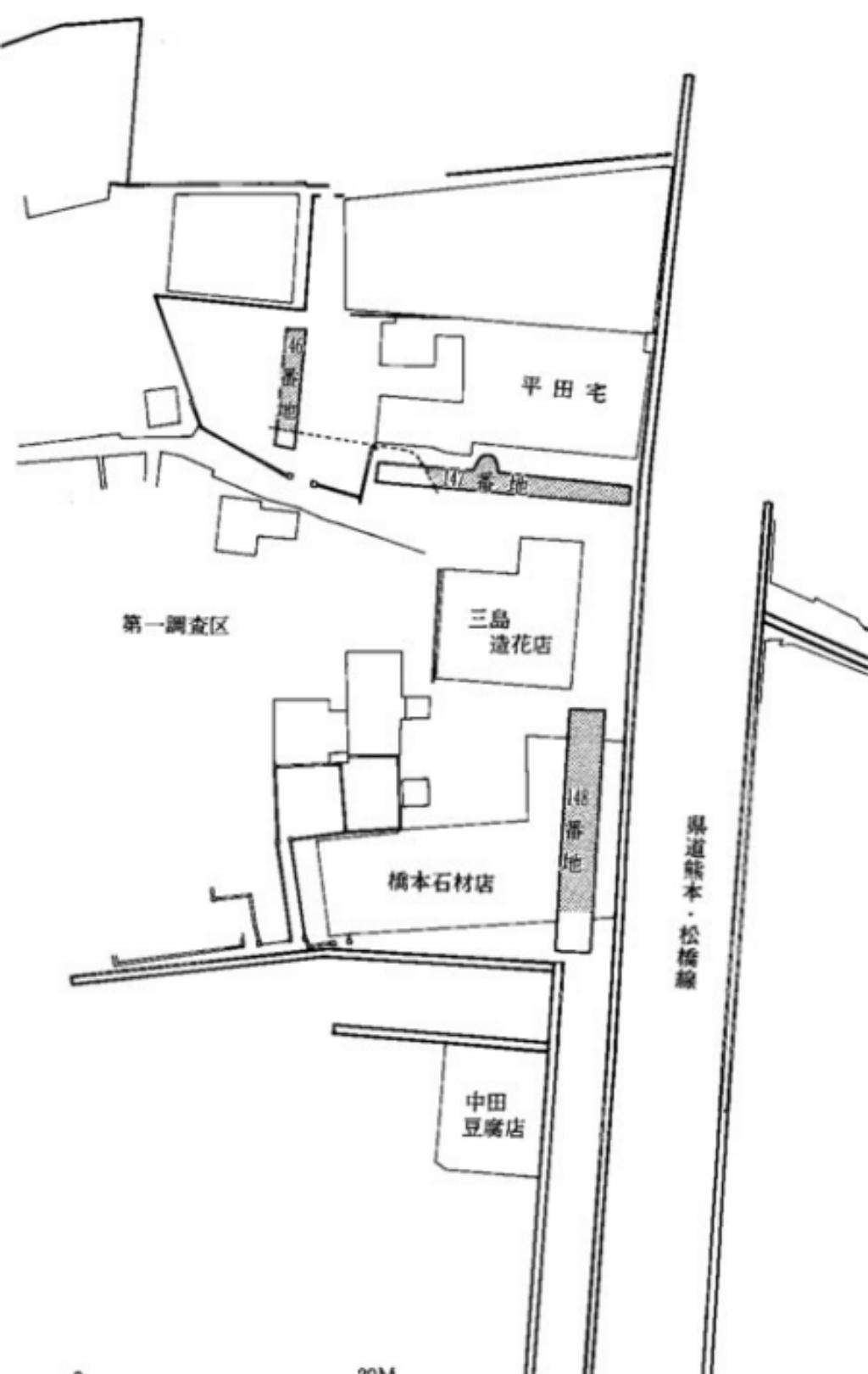


旧三島宅敷地南壁土層断面圖



卷之三

土	砂利が多く混入 木炭、ガラス片、小石を多く混入 赤粒子、木炭、小石、木の根を多く混入 明黄褐色土ブロック混入 赤粒子、木炭、小石、木の根を多く混入 明黄褐色土ブロック混入 赤粒子、木炭、小石、木の根を多く混入 明黄褐色土ブロック混入
---	---



第5図 昭和58年度肥後國分僧寺遺跡調査地区

M.N



に客土された土層である。3層は暗褐色土に明黄褐色土ブロックを含む固く締まった層で、2層客土の際、整地された層である。4層は暗褐色土に明黄褐色土ブロックを含む軟弱な層で、5層は軟弱な暗褐色土層である。

遺構は、固く締まった暗褐色土・6層を切る形で、7層の明黄褐色土上面で検出された。方向・字図等からして、橋本石材店前で検出された溝の北側延長部分と考えられる。

尚、同地域は土質が軟弱で、発掘調査幅を広げると北側民家の土台が崩壊する怖れがあるので、これ以上の調査は不可能であった。

(3) 出水1丁目146番地

調査地は、旧平田宅敷地跡で国庫補助対象の民地である。平田宅敷地の南側一部が区画整理事業に伴う道路新設部分にかかるため、その隣接地として調査した。しかし、民地という事で諸々の問題があり、そこで同敷地内に幅2m、長さ8mの試掘溝1本を設定し、調査する事にした。

調査は8月の上旬、旧三島宅敷地跡の調査と相前後して行った。その結果、試掘溝の南端から北へ1m行った地点の地表下1.4mで、固く締った褐色土層・6層内に南から北に傾斜する落ち込み面が検出された。落ち込み内の土壤堆積状態は、ほぼ平行に軟弱な暗褐色土・5層が一層堆積している。5層の上層は、暗褐色土に明黄褐色土のブロックが混入した軟弱な層・4層で、現代の攪乱は4層内まで及んでいる。遺物は5層内にまで布目瓦、土師器、染付茶碗等の小破片が見られる。以上の試掘結果及び字図等から判断して、上記の落ち込みは147、148番地でも検出された溝の北側延長部分で、溝南端立ち上がり部分と考えられる。尚、調査は北側に別の民家があってこれ以上の発掘ができず、溝北側の立ち上がり部分の確認が出来なかつた。

2. 第2調査区

第2調査区は、調査面積の大部分を県住宅課のモデル建設予定地が占め、同建物の周囲を木前寺土地区画整理事業計画の幅6mの道路が通り、更には一部民地が含まれる地区である。

調査は同所一帯の民家解体に合わせて順次発掘調査を実施したため、同地区的調査が完了するのに7ヶ月間を要した。尚、モデル建設予定地と道路建設予定地部分の調査は、上記の理由から3期に別けて行ない、その都度埋め戻し、次区に移るといった具合であった。

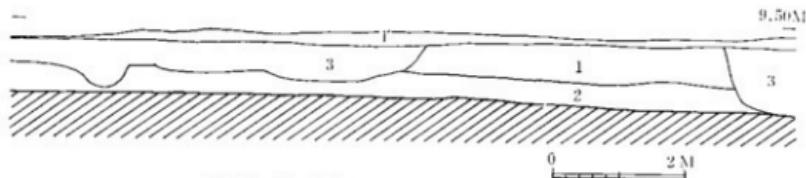
本調査区内からは、溝遺構8本、墓塚2基、竪穴遺構1基が検出された。これらの遺構の大部分は県住宅課敷地内からの検出で、いずれも中世～近世の遺構であった。

(1) モデル住宅・区画整理道路建設予定地北側

(熊本市出水1丁目320・327番地)

モデル住宅建設予定地内を東西に走る幅3mの道路(出水1丁目294番地地先)があり、家解体の時期等との関係から、道路を挟んで調査区を南北に分断する形となった。本調査はその道路北側部分である。

調査は5月中旬と9月初旬の2期に別けて行った。調査の結果、地表下40~50cm程が攪乱を受けており、攪乱層下に直に地山の明黄褐色土層が見られ、現代の攪乱(ゴミ穴)が地山面で多數確認されたのみで、特記すべき遺構・遺物は検出されなかった。調査地区は、第3調査区とは家1軒を挟んだ距離で、戦前は竹林又は畠地であったが、戦後住宅化の波を受け、地山の面まで攪乱されていた。



第6図 第2調査区 試掘溝南壁土層断面図

1 層 表土

1' 層 客土(家解体の際の瓦を多く含む土)

2 層 地山(明黄褐色土)

3 攪乱(ゴミ穴)

(2) モデル住宅・区画整理道路建設予定地南側

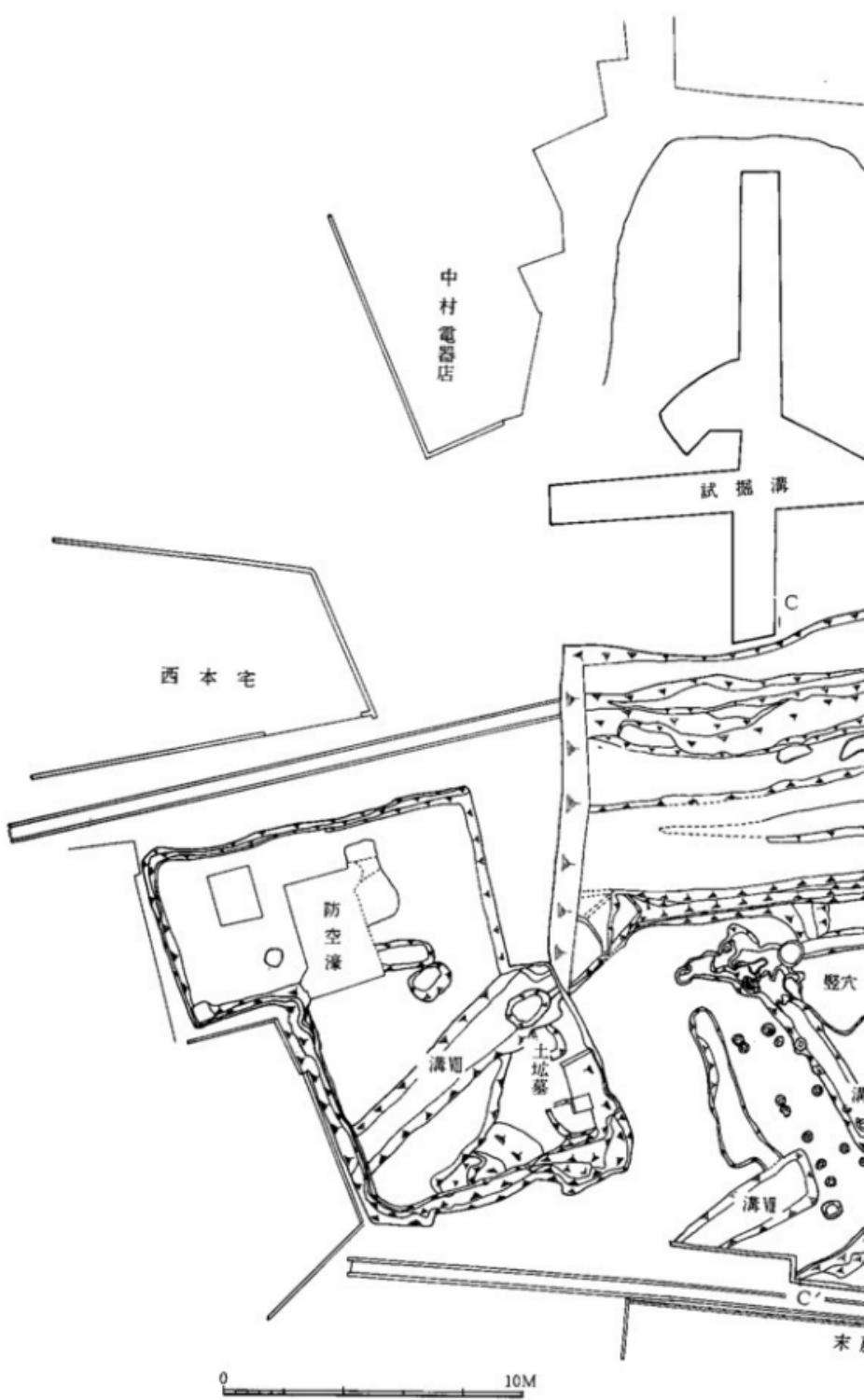
(熊本市出水1丁目293、294、295、296、302—2番地)

調査地は、旧西本・林田・竹中宅敷地跡である。調査区全域に遺構が分布している。溝遺構が8本、墓塚が2基、堅穴遺構が1基である。各々順次説明して述べたい。

1) 溝 I

住宅課敷地内のほぼ中央部、出水1丁目294番地地先の道路真下で検出されたものである。同所と294番地は、戦前は320番地と296番地に挟まれた北西から南東に細長く伸びた窪地で、戦後盛土されたものである。

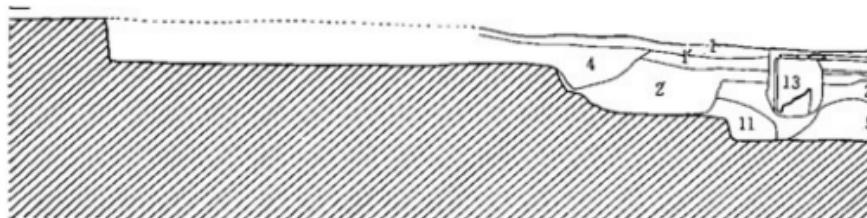
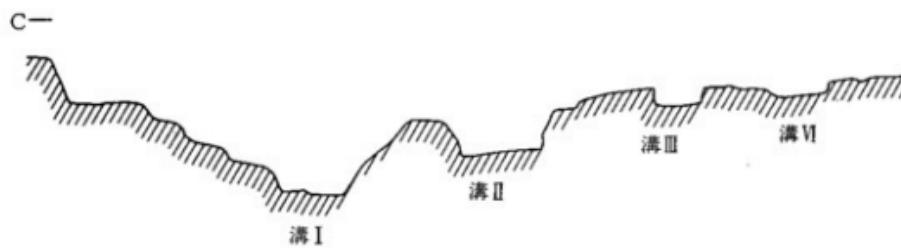
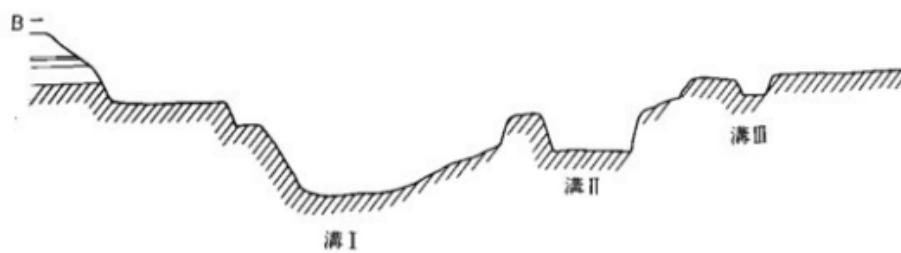
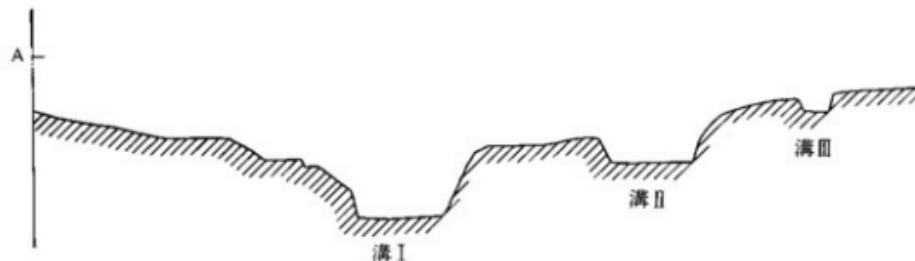
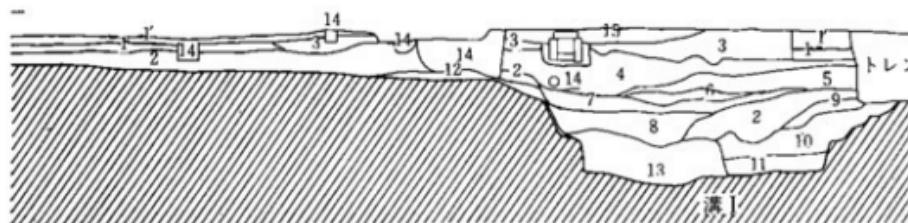
溝は北西から南東の方向に流れ、地山の緑灰色土層を掘り抜き、砂質の暗褐色土層に達する溝である。溝内からは近世染付茶碗片が出土しており、江戸時代後期頃に掘られた溝と考えられる。



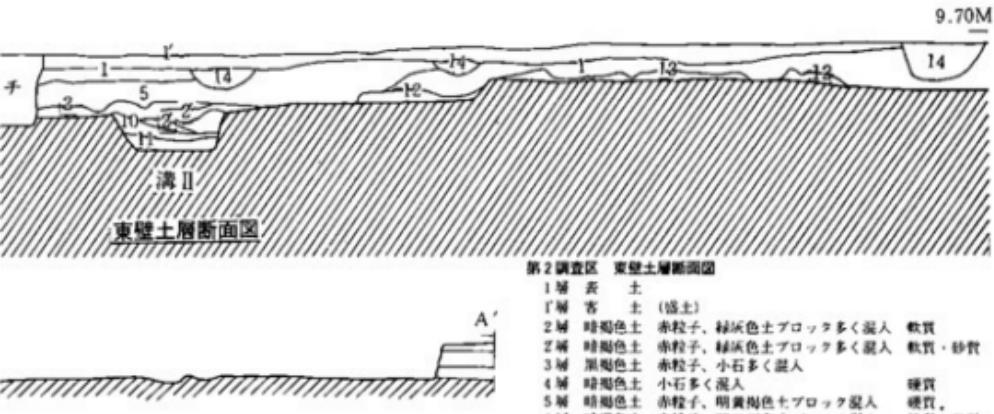
第7図 第2調査



区 平面実測図

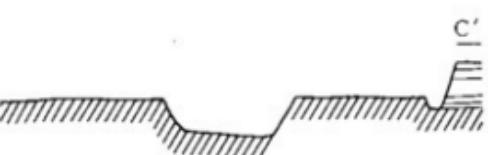
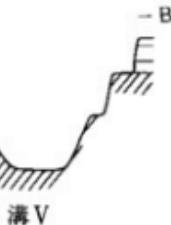


第8図 第2調査区住宅課敷地



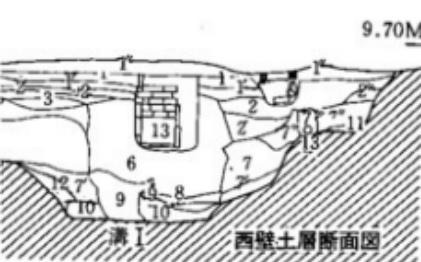
第2調査区 東壁土層断面図

1層	表 土	
1層	表 土 (盛土)	
2層	暗褐色土	赤粒子、緑灰色土ブロック多く混入 軟質
2層	暗褐色土	赤粒子、緑灰色土ブロック多く混入 軟質・砂質
3層	黒褐色土	赤粒子、小石多く混入
4層	暗褐色土	小石多く混入 硬質
5層	暗褐色土	赤粒子、明黄褐色セブロック混入 硬質
6層	暗褐色土	赤粒子、明黄褐色土ブロック混入 軟質・砂質
7層	暗褐色土	赤粒子、木炭多く混入 軟質
8層	暗褐色土	赤粒子、緑灰色土ブロック混入 粘質
9層	明黄褐色土 ブロック	
10層	暗褐色土	緑灰色土大ブロック多く混入 砂質
11層	暗褐色土	緑灰色土ブロック多く混入 多質
12層	地 山 (明黄褐色土)	硬質
13層	地 山 (緑灰色土)	硬質
14層	堆 垢 (建物基礎、水道管、雨溝、ゴミ穴等)	
15層	アスファルト	



第2調査区 西壁土層断面図

1層	表 土	
1層	表 土	砂利を多く混入
1層	表 土	砂利
2層	暗褐色土	
2層	暗褐色土	赤粒子、木炭、小石を多く混入、鉄分を多く含む
2層	暗褐色土	木炭、小石を混入 (近世陶器片混入)
3層	練炭灰	
4層	暗褐色土	木炭、セメント片混入
5層	暗褐色土	木炭、小石、緑灰色土ブロック多く混入、鉄分を多く含む
5層	暗褐色土	木炭、小石、緑灰色土小ブロック混入
6層	暗褐色土	(近世陶器片混入)
7層	暗褐色土	赤粒子、地山 (明黄褐色土、緑灰色土) ブロック多く混入
7層	暗褐色土	明黄褐色土小ブロック混入
7層	暗褐色土	赤粒子小石混入
7層	暗褐色土	木炭混入
8層	緑灰色土	緑灰色土ブロック混入
9層	緑灰色土ブロック	
10層	暗褐色土	地山 (明黄褐色土、緑灰色土) ブロック 混入、軟弱で興奮を放す。
11層	地 山 (緑灰色土)	硬質
12層	地 山 (暗褐色土)	硬質・砂質
13層	堆 垢 (井戸、カマド、倒溝、水道管等)	



西壁土層断面図

内土層断面図・遺構断面図

ii) 溝Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ

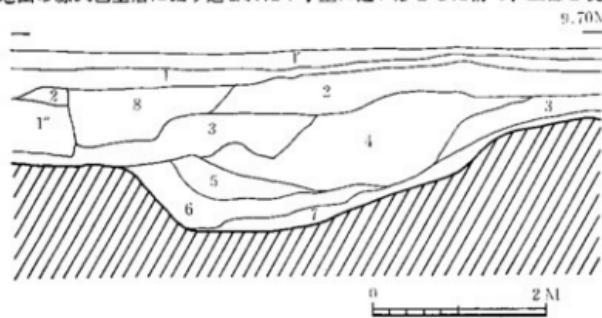
溝遺構は、旧西本宅敷地（294番地）と旧林田宅敷地（295番地）内からの検出である。溝Ⅱは、上記の境部分で検出されたもので、溝の南壁上部には3段の石垣が築んである。溝Ⅱは溝Ⅰと同様に北西から南東方向に流れしており、旧林田宅門前付近が基点である。溝Ⅱ西端の南壁上で、北西から南東方向に伸びた溝Ⅲと南北に伸びた溝Ⅵが交わり、約1m程下の溝Ⅱへ流れ込む形で落ち込んでいる。又、溝Ⅲに交わる南北に伸びた溝Ⅳも、出土遺物等から上記3溝と同時期のものと考えられる。

上記の溝内からは、比較的新しい近世の染付茶碗片が出土しており、明治時代～大正時代に存在した溝と考えられる。

iii) 溝Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ

モデル住宅建設予定地及び道路建設予定地内からの検出である。溝Ⅴ・Ⅶ・Ⅷは、いずれも東西方向に流れている。

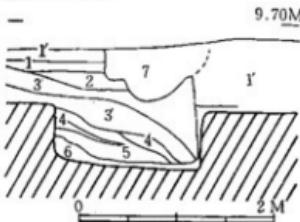
溝Ⅴは、地山の緑灰色土層に掘り込まれたV字型に近い形をした溝で、上部を現代の擾乱で



第9図 第2調査区溝V西壁土層断面図

1層 表土	5層 明褐色土 緑灰色土ブロック多く混入 砂質
1'層 客土（盛土）1'層客土（埋土）	6層 暗褐色土 赤粒子、緑灰色土ブロック混入 砂質
2層 暗褐色土 赤粒子小石混入 軟質	7層 暗褐色土 緑灰色土ブロック混入 砂質
3層 暗褐色土 赤粒子混入 軟質	8 層 搪乱（ゴミ穴）
4層 暗褐色土 赤粒子、緑灰色土ブロック混入 砂質	

1層 表土
1'層 客土（盛土）1'層客土（埋土）
2層 暗褐色土 木炭混入 軟質（鉄片、陶器片混入）
3層 暗褐色土 赤粒子多く混入 軟質
3'層 暗褐色土 赤粒子多く混入 軟質（3層よりも暗）
4層 暗褐色土 赤粒子、明黄褐色土ブロック混入 軟質
5層 暗褐色土 黄粒子、明黄褐色土ブロック混入 軟質
6層 暗褐色土 赤粒子多く混入 軟質
7 層 搪乱（ゴミ穴）



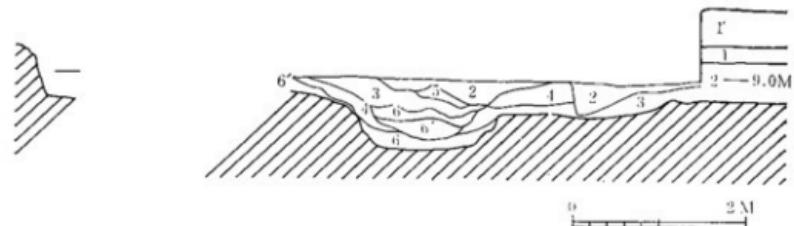
第10図 第2調査区溝V西壁土層断面図

破壊されてはいるが、その中央部には布目瓦片が翻と堆積しており、あたかも投げ捨てられたかの様である。

溝Ⅷは、溝Vと同様に地山の緑灰色土層に掘り込まれたU字形の溝で、東端が検出されている。溝は東から西方向に傾斜しており、布目瓦片が多量に埋土内に混入している。

溝Ⅸは、東端付近と溝上部を戦前の耕作等で擾乱・破壊されてはいるが、溝V・VII同様に緑灰色土層の地山に掘り込まれたU字形の溝である。溝の西端からは多量の布目瓦片が出土しているが、東に行くにしたがって減少している。

上記3溝内の下層部からは、回転ヘラ切り及び糸切り底の土器器片等に混って、龍泉窯の青磁片が出土している。このことにより、上記の3溝は、凡そ13世紀・鎌倉時代頃の溝と考えられる。



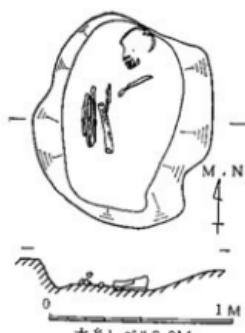
第11図 第2調査区 溝Ⅸ東壁土層断面図

1層 表土	4層 暗褐色土 上軟質
1'層 客土（盛土）	5層 暗褐色土 赤粒子多く混入 硬質
2層 暗褐色土 赤粒子多く混入 軟質	6層 暗褐色土 赤粒子、明黄褐色土ブロック混入 軟質
3層 暗褐色土 赤粒子混入 軟質	6'層 暗褐色土 赤粒子、明黄褐色土ブロック混入 軟質

iv) 近世の土塙墓 (12図)

県住宅課敷地内で、東西に伸びる溝（溝Ⅸ）の東端付近の調査中、土塙墓1基が検出された。検出された墓は主軸を真北に向けた現存上面で長さ1.2m、中心部幅約1m、深さ約0.15mの大きさで、素掘りのものである。土塙内からは、真北側を枕にした人骨が検出され、体の右側を下にした横臥屈葬であった。

土塙墓は地山の固く締った緑灰色土に掘り込まれており、床面は僅かに西端が下っているだけで、ほぼ平坦であった。尚、埋土は暗褐色の軟弱な土で、表土層下で確認された層と同一のものである。検出された人骨の保存状態は悪く、土圧及び現代擾乱等で頭部はつぶれ、上腕骨・大軋骨・脛骨のみ



第12図 第2調査区 近世の土塙墓実測図

がかろうじて残存していただけで、墓塙内からは副葬品等は見出せなかった。

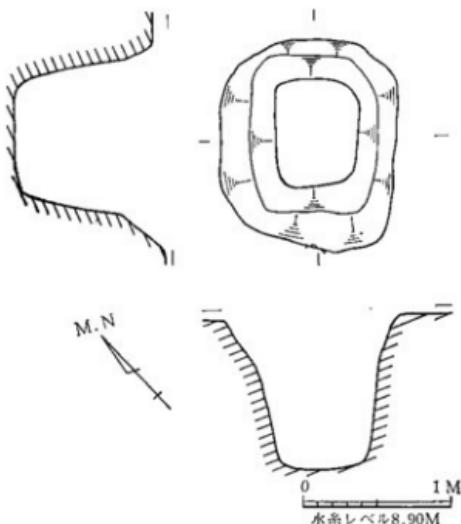
土塙墓は、周囲に江戸時代後期頃からの墓が数十基あり、地元の話等から判断して、江戸時代後期～明治期頃の墓と考えられる。⁽²⁾

v) その他の遺構

第2調査区の県住宅課敷地内より、意味不明の土塙と竪穴遺構が、各1基づつ検出された。

土塙（第13図）

旧林田宅母屋の東南隅付近の調査中に検出されたもので、緑灰色土の地山面まで掘り込まれた現存上面で1.4m×1.2m、深さ1.0～1.1mの南北にやや長い長方形の土塙である。掘り込みは、僅かに2段掘りの様相を呈しており、床面は平坦である。尚、土塙内の上層部から土師器壺・皿の小破片が出土している。

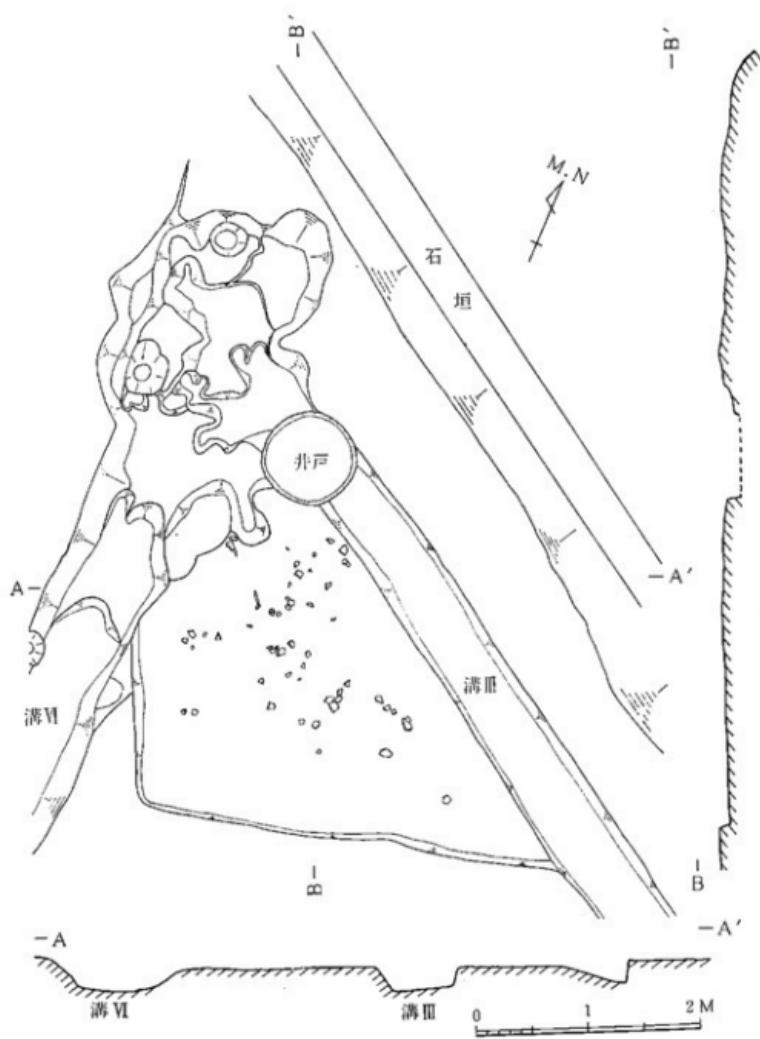


第13図 第2調査区土塙実測図

竪穴遺構（第14図）

旧林田宅玄関付近の調査中に検出されたもので、近世のⅢ・Ⅶ号溝に挟まれた残存南幅3.7m×西壁1.5m、深さ0.1mの明黄褐色土地山面に掘り込まれた方形の竪穴遺構である。床面は平坦で壁面は床面よりほぼ直に立ち上がっている。暗褐色で赤粒子の多く混入した砂質の埋土内からは、土師器・須恵器片が投げ捨てられた状態で出土している。

第2調査区内からは、数十個のpit及び土塙が検出されているが、いずれも現代の擾乱（ゴミ穴）や現代の建物に關係するものである。しかし、上記の土塙は他の物とは造りが違っており、いかなる性格のものは推測の域を出ないが、周囲に江戸時代後期～明治期の墓がある事から、墓塙ではないかと考えられる。竪穴遺構は、東西の壁面を近世のⅢ・Ⅶ号溝で切断され、更には北壁を井戸等の擾乱で破壊されており、いかなる性格の遺構かは不明である。尚、遺構の床面は軟弱でpit等の遺構は見出せない。



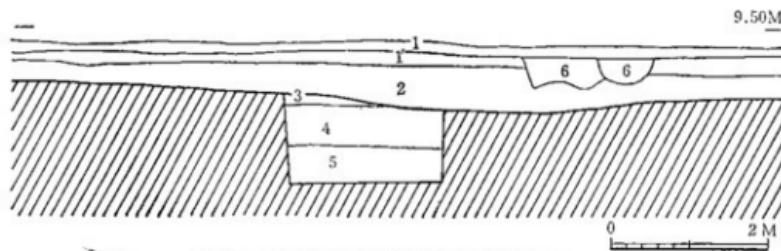
第14図 第2調査区 積穴遺構実測図

(3) 熊本市出水1丁目302—4番地

調査地は、西本宅建設予定地の民地南半分である。上記敷地の南側を区画整理事業に伴う幅6mの道路が東西に走り、東側は県住宅課のモデル住宅建設予定地に接している。戦前、同所は畠地として使用されていた場所で、現地表面より約0.3~0.4m程下っていたとの事である。⁽³⁾

調査の結果、0.1~0.2m厚の表土層・1層下に、0.1~0.2m程の石炭ガラ、練炭ガラ、砂利を多く含む層・1'層が見られ、その下に層厚0.2~0.5m程の軟弱な暗褐色土層・2層があり、2層は旧耕作土と考えられる。2層下は地山の明黄褐色土層・3層である。

西本宅敷地内からは、地山面に掘り込まれた防空壕跡と現代攪乱（ゴミ穴）等の他は、特記すべき遺構は見られず、遺物も若干の布目瓦と土師器片が染付茶碗片・ガラスビン等と一緒に1'層・2層内から検出されただけである。尚、調査地の北半分は使用中の生活道路と民家があり、調査は不可能であった。



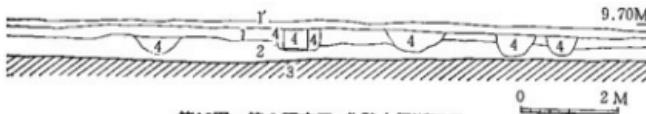
第15図 第2調査区西本宅敷地北壁土層断面図

1層 表土	4層 地山（緑灰色土）硬質
1'層 砂利、練炭ガラ、石炭ガラ 混入	5層 地山（暗褐色土）硬質 砂質
2層 暗褐色土 赤粒子多く混入 軟質	6 攪乱（ゴミ穴・砂利等）
3層 地山（明黄褐色土）	

3. 第3調査区 (出水1丁目313・314・315番地)

調査地は旧水民氏所有の駐車場跡地で、現在は県水前寺土地区画整理事務所の管理する仮換地予定地である。

現場は、現在も付近の民家の駐車場となっており、敷地一面砂利が敷きつめである。調査は6月中旬に開始した。その結果、砂利層下は固く締まった表土層・1層で、2層は厚さ0.4~0.5mの軟弱な暗褐色土層である。2層下に地山の明黄褐色土層が見られる。2層は、同所一帯が元は竹林又は畑地跡といわれている所から、戦前・戦後の耕作及び住宅化の波を受けた土層と考えられる。尚、同地区内からは遺構らしきものは検出されず、遺物も1・2層内から若干の布目瓦小片が検出されたのみで、特記すべきものは見られなかった。



第16図 第3調査区 北壁土層断面図

1層 表土

1'層 砂利

2層 暗褐色土 赤粒子多く混入 軟質

3層 地山 (明黄褐色土)

4 濃乱 (建物基礎、排水溝等)

註

- (1) 橋本四郎氏話……同氏の父（昭和25年没）の話では、同所付近にレンコン堀と称する溝があったとの事。
- (2) 昭和初期頃、同所に小さな盛土が確認されている。
- (3) 西本ハツ氏の話。

第Ⅳ章 遺物

出土遺物

本遺跡からは、古代から現代に到るまでの遺物が出土している。布目瓦・土師器・須恵器・瓦質土器・青磁・陶磁器等で、瓦を除いては量は少なく、また破片が多い。

1. 瓦類

今回の発掘調査において出土した瓦類は、総重量約4.2tであった。これらは全て破片として出土し、その大半を占めるのは平瓦と丸瓦である。

出土瓦は全て水洗いを完了し注記も大半はすませているが、まだ未整理のものがあるため今回は特徴的な瓦片数点を選出し紹介する。⁽¹⁾

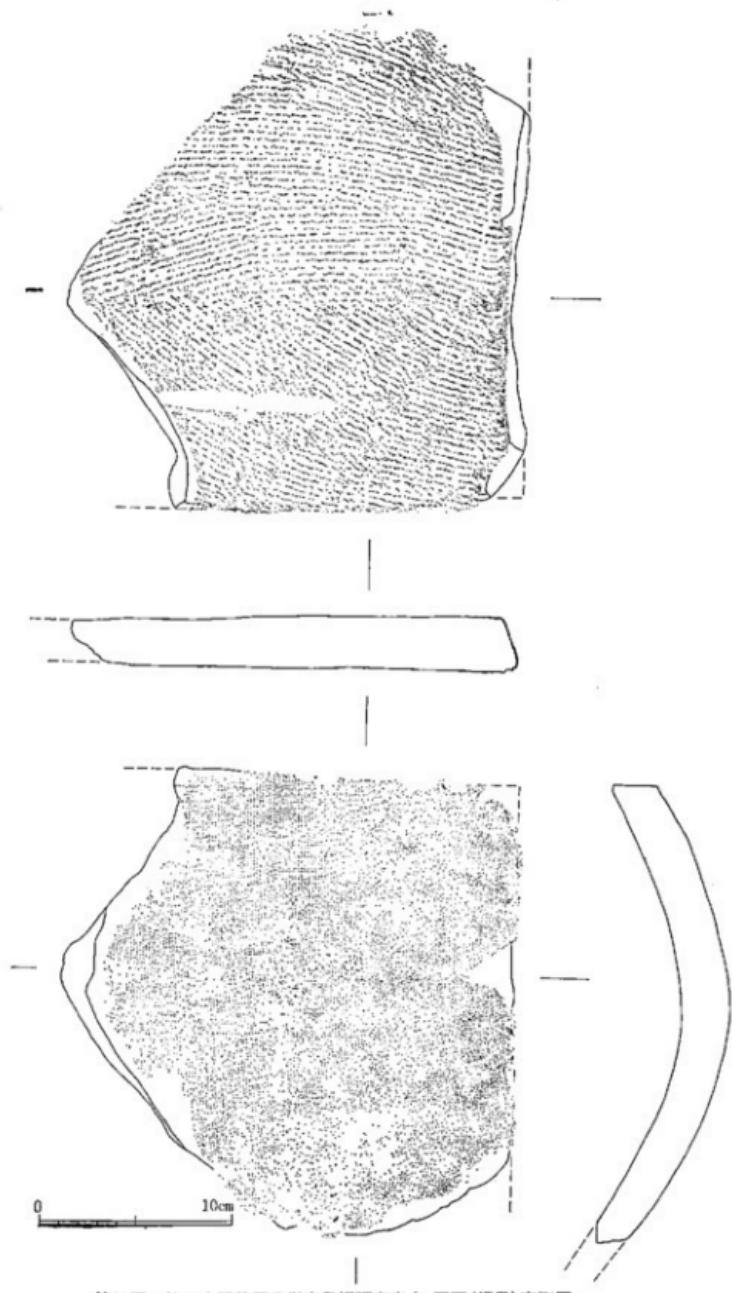
(1) 平瓦 (17~19図)

今回の発掘調査で出土した平瓦は、凹面に布目痕があるものがほとんどであり、凸面は縦目…1、格子叩き目…2、木ノ葉状の幾何学文様のあるもの…3とが出土しているが、大半は縦目・格子叩き目文様の瓦である。

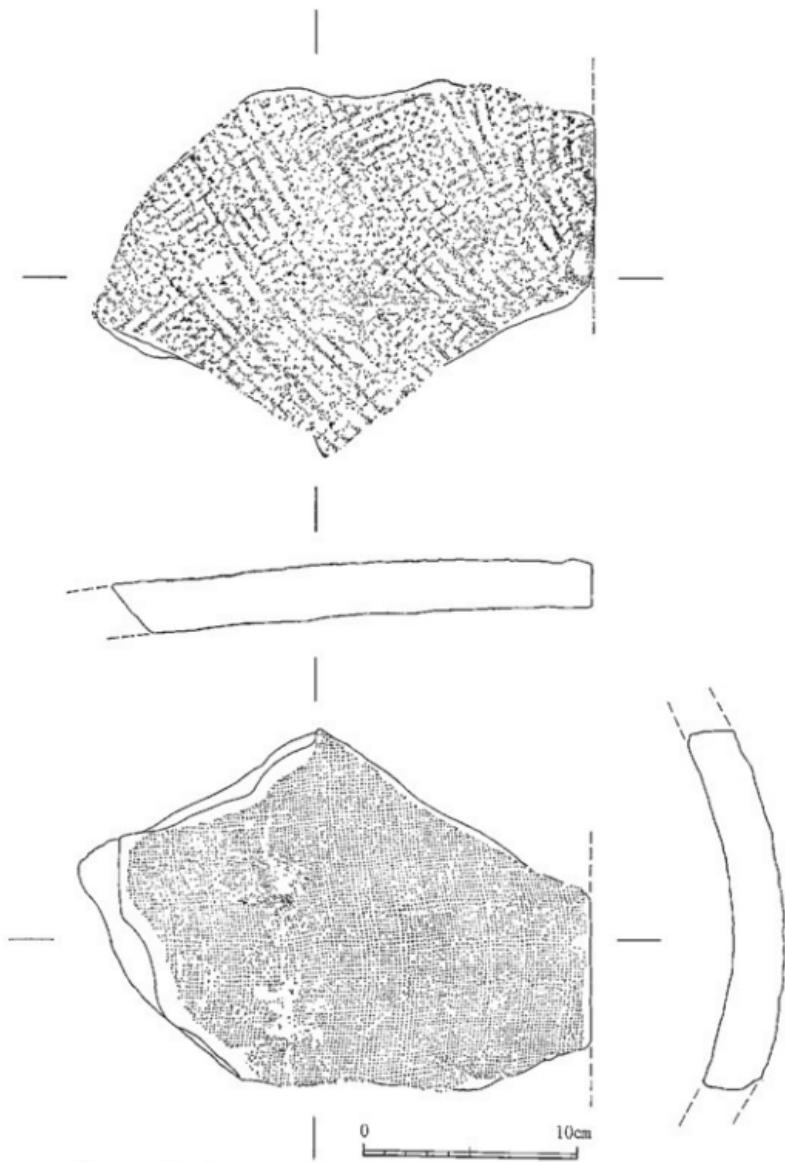
平瓦-1 溝埴上層攪乱内より出土の瓦片である。凹面は布目痕で、その上からの圧痕が認められる。凸面は縦目であり、縦方向の中央付近を境として左右の縦目の走向を異にしている。胎土はやや粗であり、焼成は良好で灰白色をなす。

平瓦-2 溝埴内より出土の瓦片である。凹面は布目痕で、その上から亀裂のある部分にナデ調整が施されている。凸面は格子叩き目であり、その上からヘラ状のものでつけたと思われる縦方向への一線のカキ傷がある。胎土は小石を少々混入するが密であり、焼成は良好で灰白色をなす。

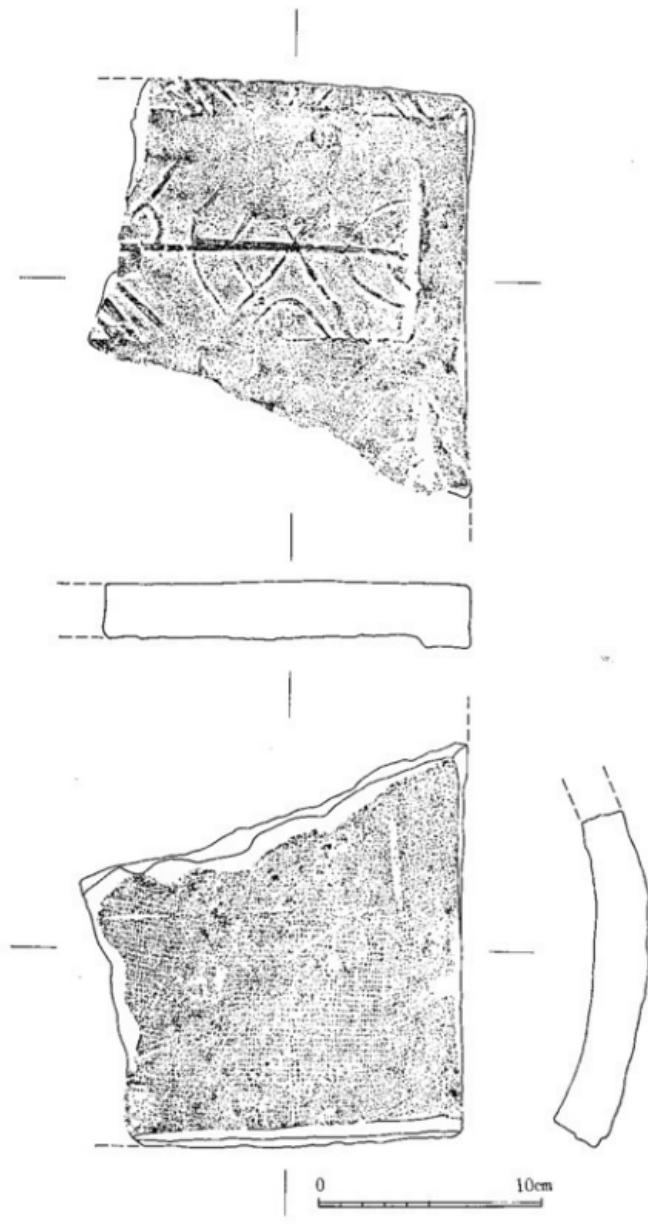
平瓦-3 溝埴上層攪乱内より出土の瓦片である。凹面は布目痕で、ナデ調整が施されている。凸面は木ノ葉状の幾何学文様の叩き目であり、その上からの微かなカキ目跡が認められる。尚、叩き目部分は平たく瓦自体は彎曲しているため、端縁より2cm程入ったところで弧状



第17図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 平瓦(縄目)実測図



第18図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 平瓦(格子目)実測図



第19図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土平瓦(木の葉状文様)実測図

に段差が付いている。胎土は小石や小砂を混入してやや粗であり、焼成は良好で灰色をなす。

(2) 丸 瓦 (第20・21図)

出土の丸瓦は、ほとんどが玉縁付であり、凹面には布目痕をこす。凸面は繩目のもの…Ⅰと、ナデなどの表面調整がなされており滑らかなもの…Ⅱに大別される。

丸瓦—1 溝Ⅵ上層より出土の玉縁付丸瓦片である。凹面は布目痕であり、玉縁部と丸瓦部の間は段になっている。凸面は繩目であり、玉縁部から丸瓦部へ少し入った部分はロクロ回転によると思われる横方向の調整がなされている。胎土は小砂を混入しやや粗であり、焼成は良好で灰色をなす。

丸瓦—2 溝Ⅶ内上層より出土の玉縁付丸瓦片である。凹面は布目痕であり、玉縁部と丸瓦部の間は滑らかではあるが少し段がついている。凸面はナデ調整がなされており微かにハケ目もついているが、繩目などではなく滑らかである。胎土は密であり、焼成はやや軟質で橙色をなす。

(3) 肋 斗 瓦 (第22図)

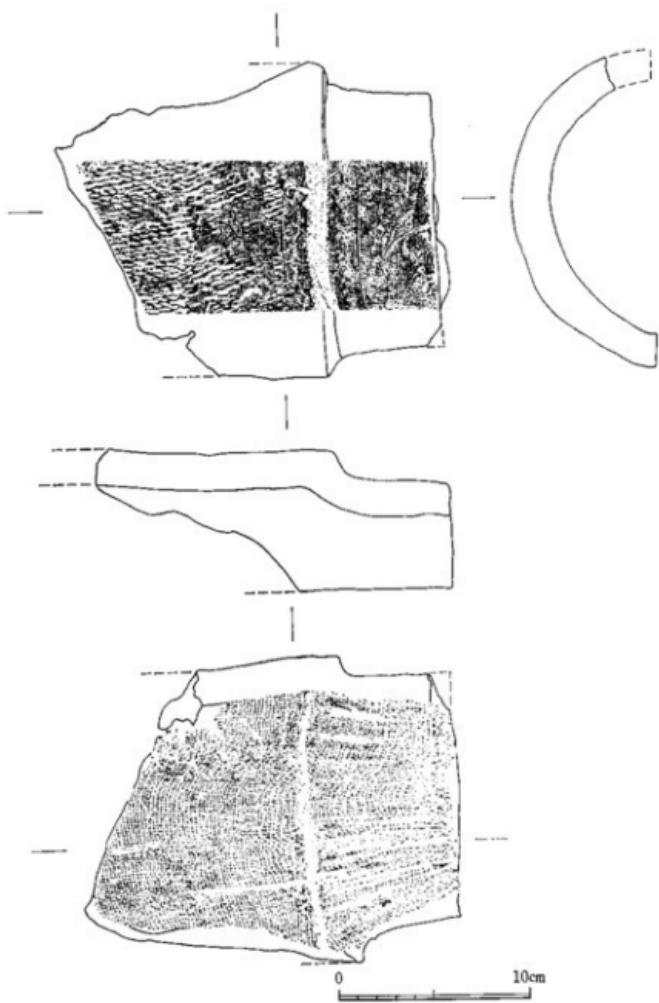
西本宅裏で表面採集したものである。長辺の一端を残すのみで全長は不明であるが、両側縁は残っており、その幅は160mmである。残存する一端の凸面側をやや銳角に削ってあり、両側縁部は、両側縁を結んだ直線に対してほぼ垂直に削られている。凸面は繩目、凹面はカキ目でその上からナデ調整がなされており、指頭圧痕も残っている。胎土はやや小砂を含むが密であり、焼成は良好で灰色をなす。

(4) 面 戸 瓦 (第23図)

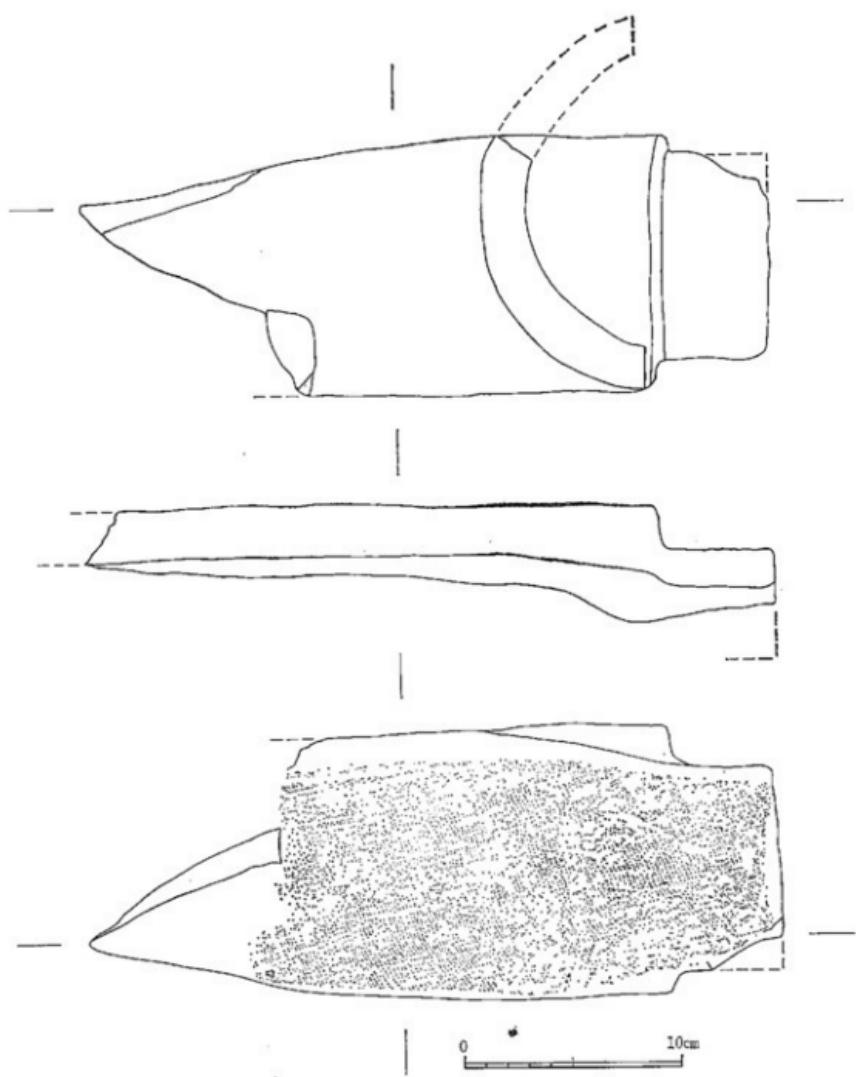
凸面はナデ調整がなされており、滑らかである。凹面は布目であるが、その縁部付近は削って面取りされている。胎土は若干小石を混入するが密であり、焼成は良好で灰白色をなす。

(5) 軒 丸 瓦 (第24~27図)

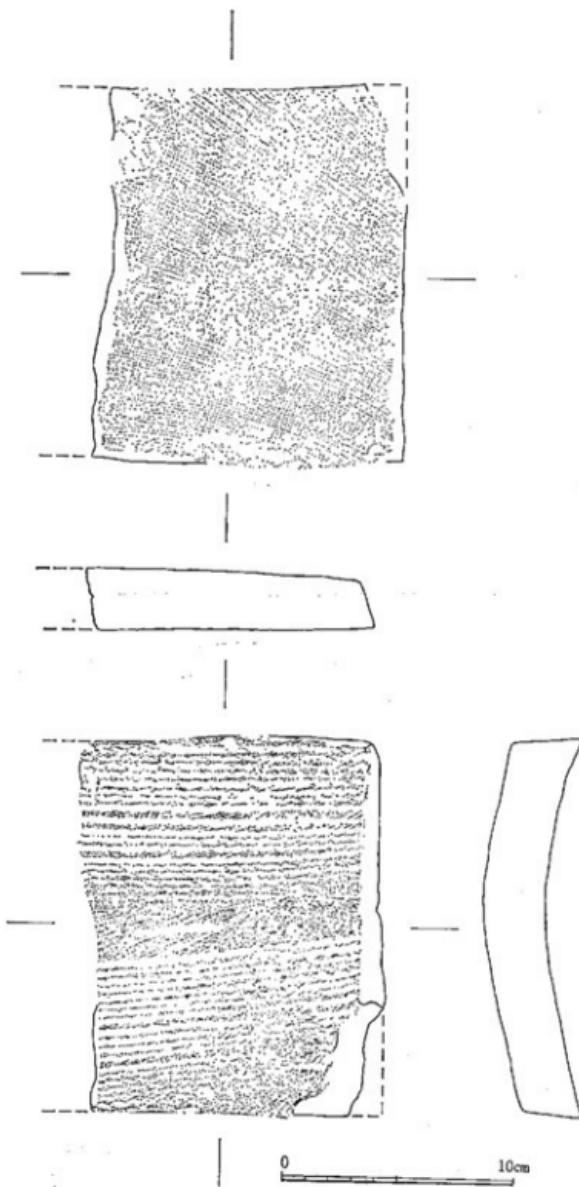
今回出土の軒丸瓦は7点を数える。全てが破片であり、外区付近の文様が隅丸五角形状とみられるもの…Ⅰ類、隅丸方形とみられるもの…Ⅱ類、珠文を配したもの…Ⅲ類に分けられる。



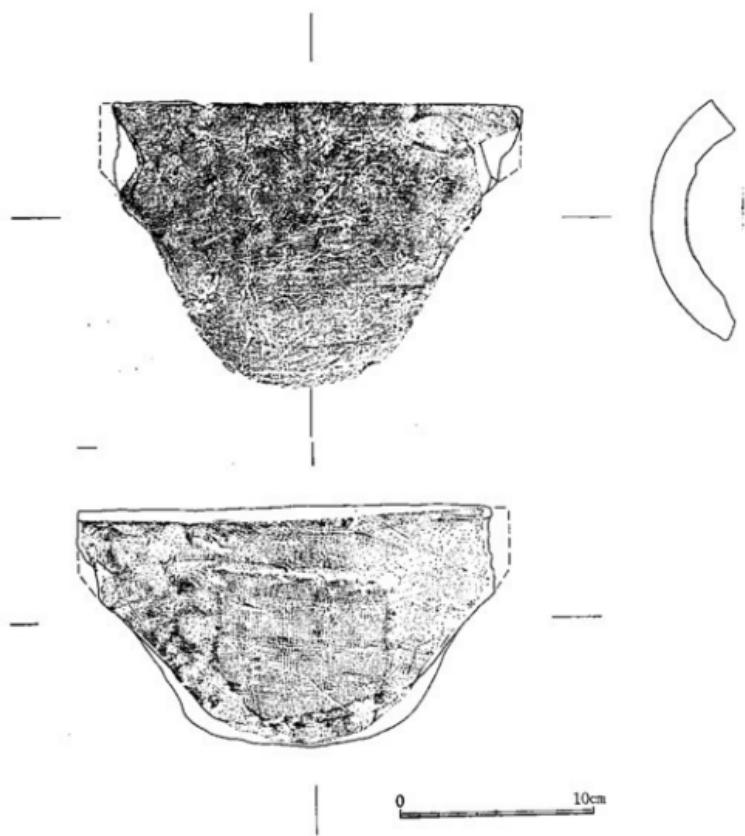
第20図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 丸瓦-1 実測図



第21図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 丸瓦-2実測図



第22図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 贏斗瓦実測図



第23図 第3次肥後国分僧寺発掘調査出土 面戸瓦実測図

軒丸瓦Ⅰ類—1 F—14区より出土の唐草文縁単弁8弁丸瓦である。復元径200mm復元中房径60mm復元弁区径127mmであり、連弁は子葉1枚を隆起線で囲んだ単弁とその間の間弁からなる。外区内縁は、右回りに流れる唐草文で隅丸五角形状とみられる。胎土は密であり、焼成は良好で灰色をなす。（肥後国分僧寺ⅠのNMⅣ類と同類と思われる）

軒丸瓦Ⅰ類—2 E—14区表土層内より出土の外区付近の破片である。復元径180mmで、外区内縁は右回りに流れる唐草文と思われる。胎土は若干小砂を混入するが密であり、焼成は良好で灰色をなす。中房と弁区の部分が欠損しているため全様は明らかでないが、外区の形状から、Ⅰ類—1と同類と考えられる。

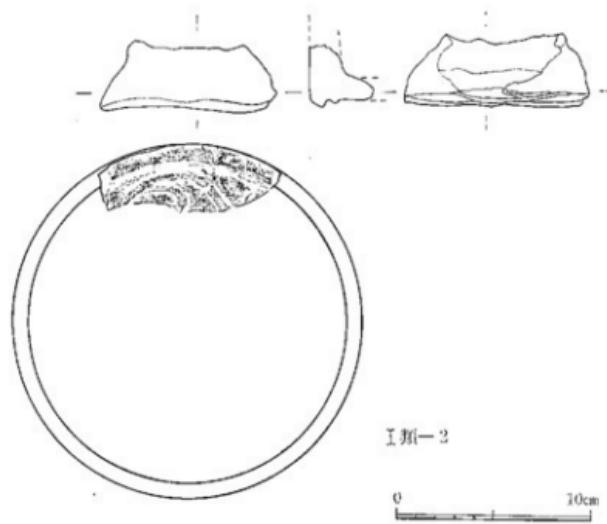
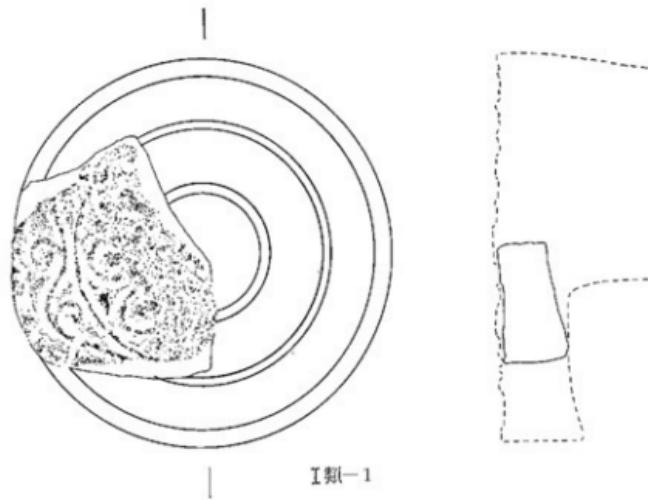
軒丸瓦Ⅰ類—3 溝V内より出土した、弁区から外区にかけての破片である。復元径190mm復元弁区径110mmで、外区内縁は右回りに流れる唐草文の隅丸五角形状と思われ、弁区は子葉1個を隆起線で囲んだ単弁とその間の間弁からなっている。胎土は密であり、焼成は良好で白灰色をなす。中房部分が欠損しており確認はできないが、Ⅰ類—1と同様単弁8弁軒丸瓦と思われる。

軒丸瓦Ⅱ類—1 F—14区より出土の外区付近の破片である。復元径200mm復元弁区径128mmで、外区内縁は右回りに流れる唐草文の隅丸方形状と思われる。胎土は密であり、焼成は良好で黒灰色をなす。（肥後国分僧寺ⅠのNMⅢ類と同類と思われる）

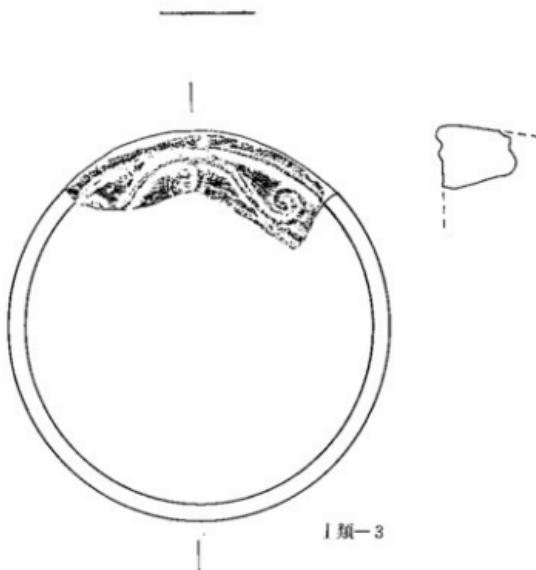
軒丸瓦Ⅱ類—2 溝II内D—6区より出土の外区付近の破片である。復元径200mmで、残存する外区内縁は右回りに流れる唐草文であり、その形状から隅丸方形状と思われる。胎土は密であり、焼成は良好で灰白色をなす。これはⅡ類—1と同類と考えられる。

軒丸瓦Ⅲ類—1 弁区外縁から外区にかけての破片である。復元径190mm復元弁区径126mm。外区内縁に大粒の珠文を間弁の延長上に配してあるのが確認でき、推定総数16個と思われる。又、外区外縁は高く隆起している。胎土は密であり、焼成は良好で黒灰色をなす。弁区と中房を欠いているため全形は明らかでないが、「肥後国分僧寺Ⅰ」のNMⅠa類に相当するとみられ、複弁8弁軒丸瓦と思われる。

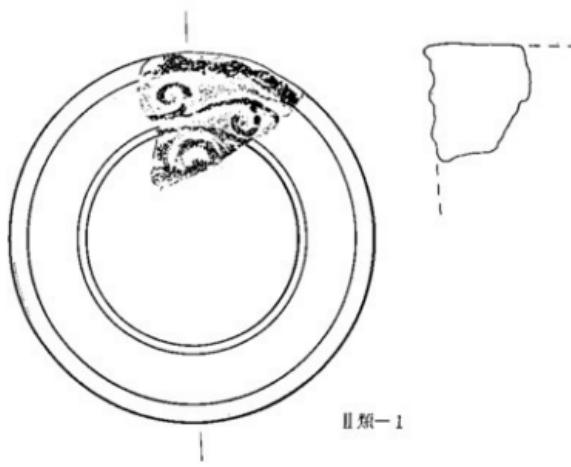
軒丸瓦Ⅲ類—2 溝V内D—14区より出土の中房、弁区の破片である。復元中房径54mm復元弁区瓦114mm。外区が欠損しているため全形は明らかでないが、弁区・中房の形状から考えて、複弁8弁軒丸瓦と思われⅢ類—1と同類であろう。胎土は密であり、焼成は良好で灰白色をなす。



第24図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 軒丸瓦実測図(1)



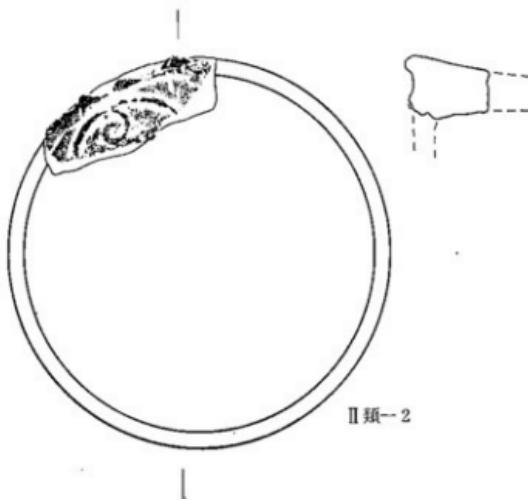
I類-3



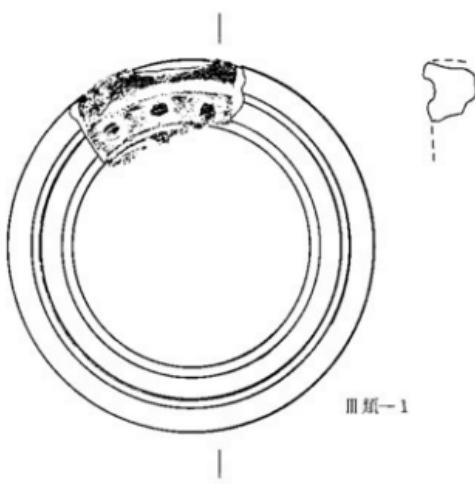
II類-1

0 10cm

第25図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 軒丸瓦実測図(2)



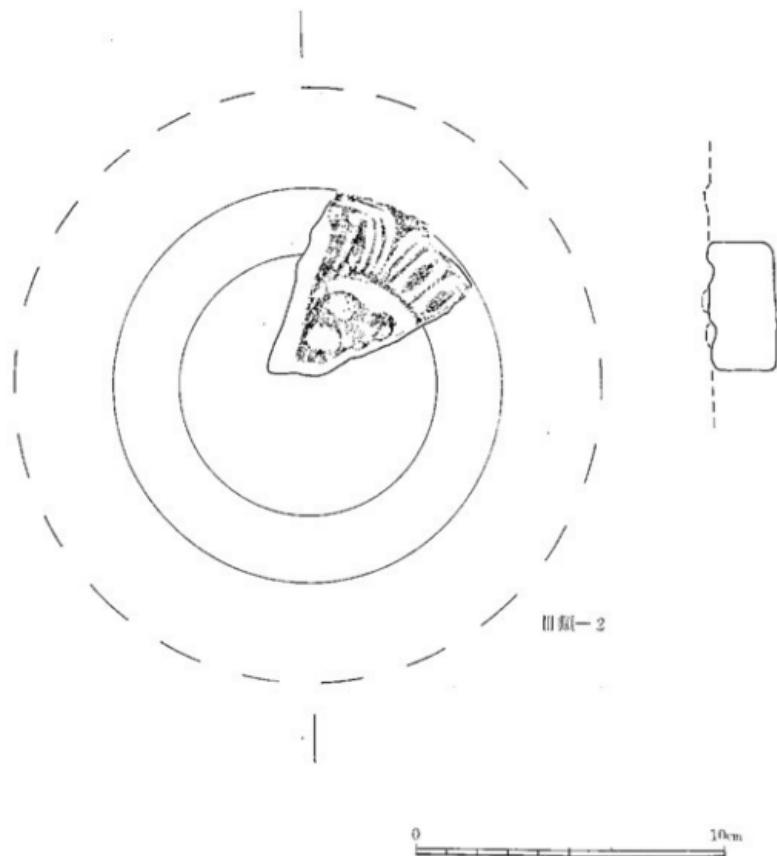
II類-2



III類-1

0 10cm

第26図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 軒丸瓦実測図(3)

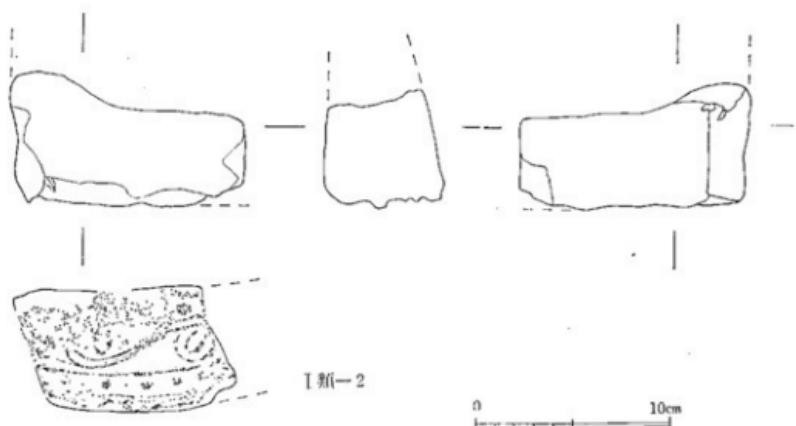
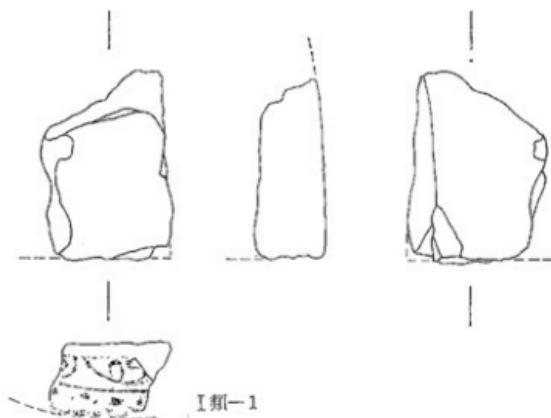


第27図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 軒丸瓦実測図(4)

(6) 軒 平 瓦 (第28~30図)

今回出土の軒平瓦は5点を数える。全て破片であり、下外区に珠文を配するもの…Ⅰ類、鋸齒文を配するもの…Ⅱ類、それ以外のもの…Ⅲ類とに分けられる。

軒平瓦Ⅰ類一 溝II内より出土の瓦当右下部の破片で、頭は段頭である。内区の唐草文は大きく巻いた主葉の内側に2支葉を判うとみられ、下外区の珠文の1つの両脇に小粒の珠文が



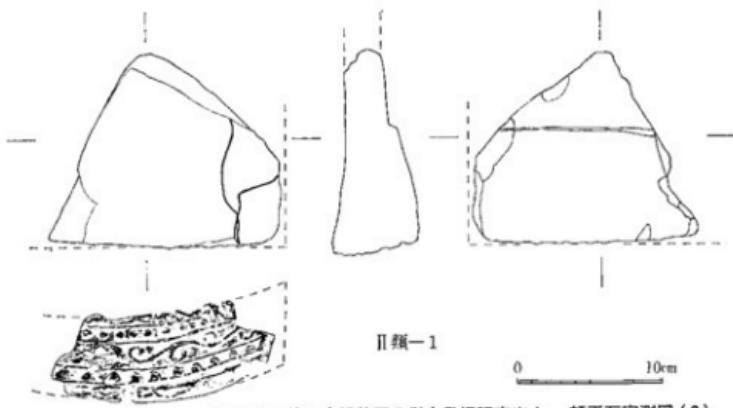
第28図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 軒平瓦実測図(1)

施されている。胎土は若干小砂を混入するが密であり、焼成は良好で灰色をなす。これは「肥後國分僧寺I」のNHI類の2と同型式と思われ、均正唐草文軒平瓦と考えられる。文様は瓦当文様の隅まで表出されておらず、途中で切断された状態になっている。

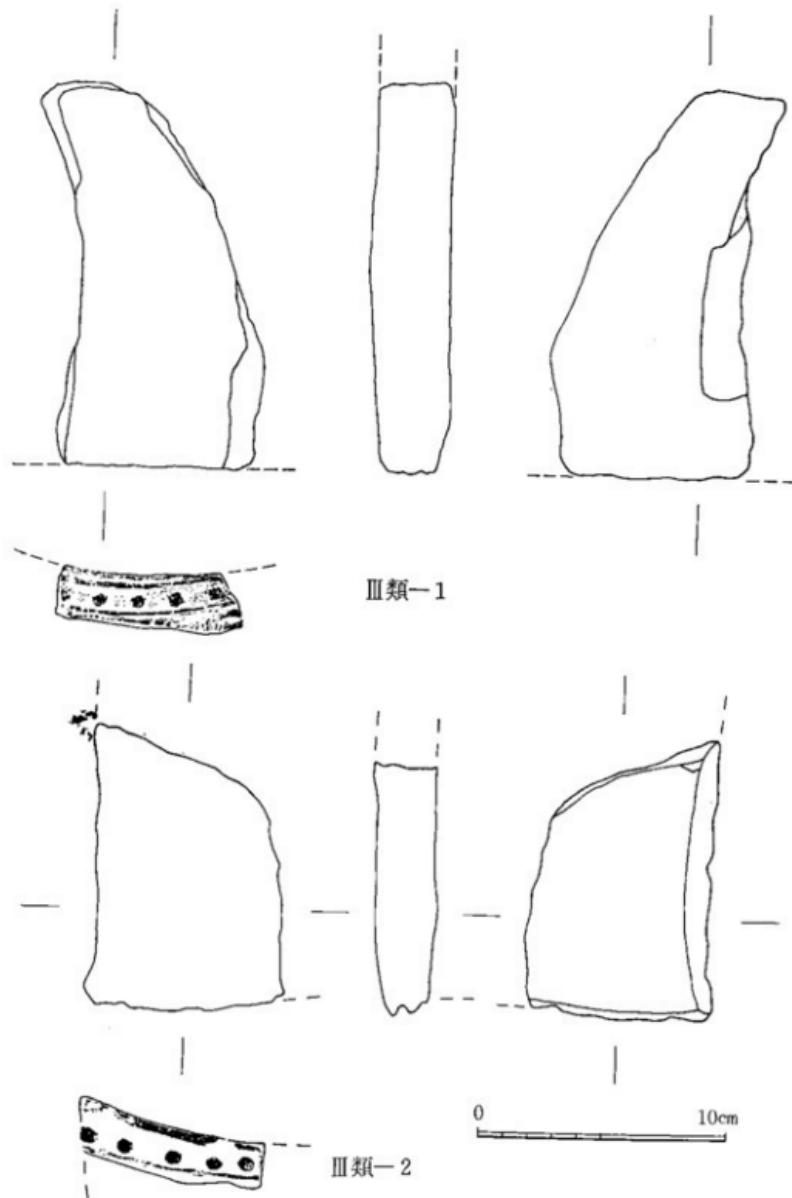
軒平瓦I類—2 C—2区表土層より出土の瓦当左部の破片で、頸は貼り付けの痕跡が欠面にみられ段頸と考えられる。内区の唐草文は大きく巻いた主葉の内側に珠文があり、上外区の珠文に比べ下外区の珠文はやや小粒である。又、瓦当文様の隅まで表出されていない。胎土は少々小砂を混入するが密であり、焼成は良好で灰色をなす。以上よりI類—1と同類と考えられる。

軒平瓦II類 溝II内D—10区より出土したものである。瓦当の厚さは57mmで段頸である。上外区は珠文、下外区には凸鋸歯文を配し、内区は波状の茎の上下に支葉が巻き左へ流れる。胎土は密であり、焼成はやや軟質で赤褐色をなしている。

軒平瓦III類—1 凹面は布目であるがその上からヘラ削り調整がなされている。凸面は横向向へのハケ目である。瓦当上部しか残っておらず、貼り付け部の剥離痕が凸面にみられ、段頸と思われる。色調は灰色で、胎土は小砂を混入するが密であり焼成は良好である。



第29図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 軒平瓦実測図(2)



第30図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 軒平瓦実測図(3)

軒平瓦Ⅱ類—2 溝Ⅵ内より出土の上外区付近の破片である。上部凹面には布目痕が残っており、瓦当近くは支持土を付加してあったと思われる剝離痕がある。内区・下外区は欠損して全形は明らかではないが、上外区には珠文が配してある。胎土は密であり、焼成は良好で白灰色をなす。

2. 土 師 器

壺・皿・高台付塊・高壺・壺等があり、いずれも破片である。器体の底部は回転ヘラ切り離しと、糸切り離されたものとがあり、体部は横ナデ⁽²⁾・ナデ調整が施されている。出土した土器は、6世紀後半～14世紀頃までのものである。

(1) 土 師 器 壺

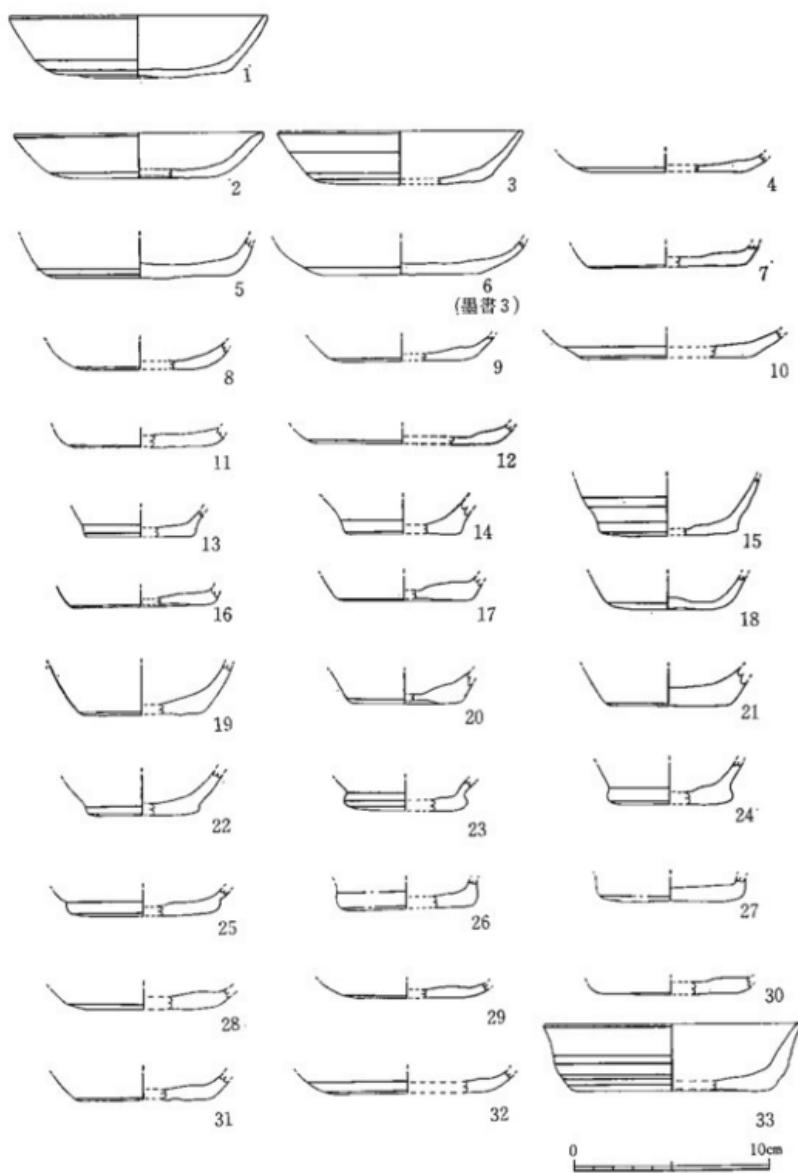
出土した土師器の大部分を占める。壺の形態特徴は、器体は船底型を呈し外底部は回転ヘラ切り離しのもの…Ⅰ類、同型で外底部が糸切り離しのもの…Ⅱ類とに大別され、更に細部の特徴からⅠ類は6つ、Ⅱ類は2つに細分化される。

壺Ⅰ類—1 (1~12) 平均口径13.0cm、平均器高2.7cmを測る。器体の体部は、外底部より直線的に立ち上がり、外上方に開く。底部はいずれも平底で、4・5・6・7・9・10・12の外底には回転ヘラ切り離し跡が明瞭に残り、1・3・4・5・6・11は内外共に丹塗り、8の外底部には墨書きが認められる。

壺Ⅰ類—2 (13~15) 器体は、外底部と体部との境が明瞭で、体部はやや屈曲ぎみに開く。底部は平底で、13・14の外底には回転ヘラ切り離し跡が認められる。いずれも底部のみの破片である。

壺Ⅰ類—3 (16~18) 器体の体部は直線的に立ち上がり外上方に開くが、内側底部と体部との境に稜が形成されている。16~18の外底部には回転ヘラ切り離し跡が見られ、18にはヘラ止め跡が認められる。底部は平底である。いずれも底部のみの破片である。

壺Ⅰ類—4 (19~21) 器体の体部は直線的に立ち上がり外上方に開くが、内側底部と体部との境に、稜を形成しないものである。いずれも外底部に回転ヘラ切り離し跡が見られ、19は内面黒色土器である。いずれも底部のみの破片である。



第31図 第3次国分寺発掘調査出土 土師器実測図 (1)

坏 I 類一5 (22~27) 器体の体部は、直線的に立ち上がり外上方に開くが、外底部と体部との間が屈曲する。底部はいずれも平底で、24以外は回転ヘラ切り離し跡が認められる。いずれも底部のみの破片である。

坏 I 類一6 (28~33) 器体の体部は、丸味をもって立ち上がる。33は口縁部が外反しているが、他はすべて底部のみの破片である。いずれも平底で、外底部に回転ヘラ切り離し跡が見られ、31には板目圧痕が認められる。

坏 II 類一1 (34~44) 平均口径12.3cm、平均器高2.9cmを測る。器体の体部は、やや丸味をもって立ち上がる。底部はいずれも平底で、外底部に糸切り離し跡が見られ、34には板目圧痕が認められる。

坏 II 類一2 (45~47) 器体は外底部と体部との境が明瞭で、体部は内巻きみに立ち上がる。底部はいずれも平底で、糸切り離し跡が明瞭に見られる。46の体部は、幅広の横ナデ調整である。いずれも底部付近のみの破片である。

(2) 土 師 器 皿

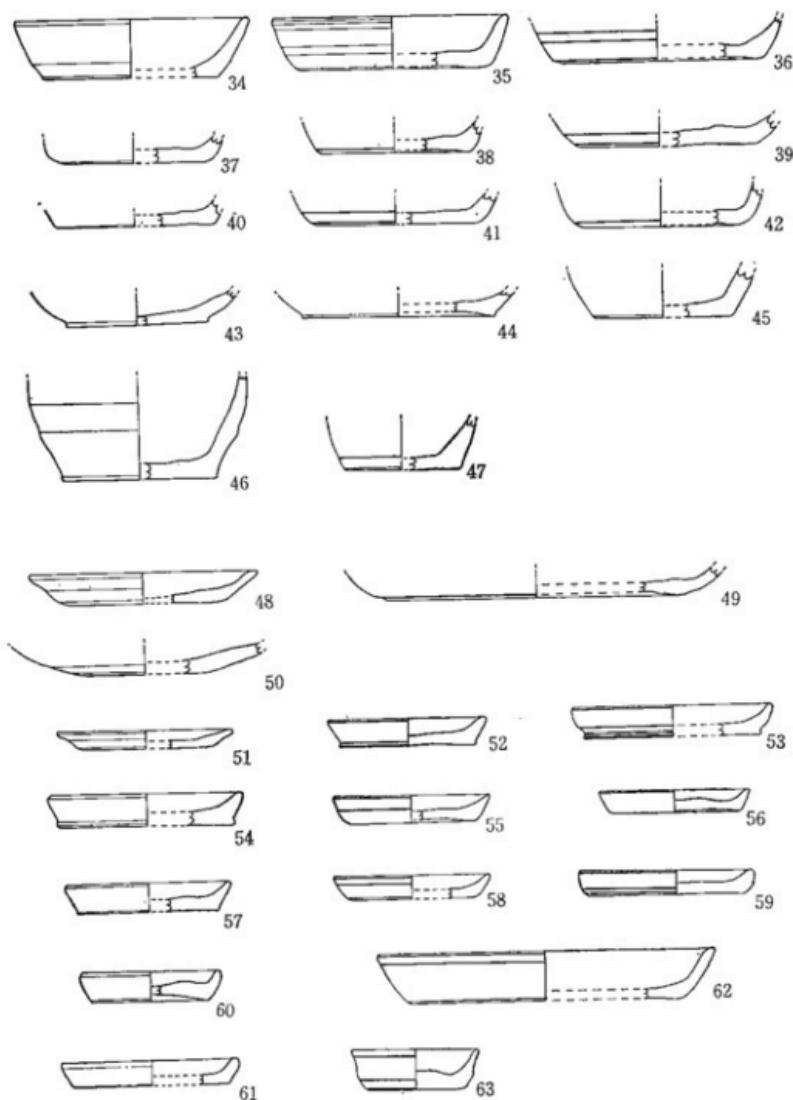
皿の形態特徴は、器体は丈の低い船底型を呈し、外底部は回転ヘラ切り離しのもの…Ⅰ類、同型で外底部が糸切り離しのもの…Ⅱ類とに大別され、細部の特徴からⅡ類は3つに細分される。

皿 I 類 (48~50) 器体の体部は直線気味に立ち上がり、広く開く。50の底部は丸味をもち、48・49は平底である。いずれも外底部に回転ヘラ切り離し跡が認められる。

皿 II 類一1 (51~58・62) 平均口径8.8cm、平均器高1.4cmを測る。器体の体部は、外底部より直線的に開く。51の口縁部は外反する。底部はいずれも平底で、糸切り離しの跡が明瞭に見られ、52~54の外底部に板目圧痕が認められる。62は坏に近い大型の皿である。

皿 II 類一2 (59~61) 平均口径8.3cm、平均器高1.3cmを測る。器体の体部は、外底部より丸味をもって立ち上がる。底部はいずれも平底で、糸切り離しの跡が認められる。

皿 II 類一3 (63) 口径6.6cm、器高2.1cmを測る。器体の体部は、外底部より丸味をもって立ち上がるが、口縁部はやや外反ぎみに開く。底部は平底で、糸切り離しの跡が認められ、



0 10cm

第32図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 土師器実測図(2)

肉厚である。

(3) 高台付塊

高台付塊の形態特徴は、器体は船底型を呈し、体部は外底部から丸味をもって立ち上がるるもの…Ⅰ類、同型で体部が外底部から直線気味に立ち上がり広く開くもの…Ⅱ類とに大別され、細部の特徴からⅠ類は2つ、Ⅱ類は3つに細分される。尚、高台付塊は底部部分の破片が大部分である。

高台付塊Ⅰ類—1 (64・65) 口径13.8cm、器高4.8cm、平均高台口径10.5cmを測る。器体は外底部から丸味をもって立ち上がり、底部は平底である。高台はいずれも低く、やや外反ぎみに貼り付けられている。焼成は良く、須恵器に近い焼きである。

高台付塊Ⅰ類—2 (66～68) 底部は平底で、高台は高く、外反ぎみに貼りつけられている。外底部に回転ヘラ切り離しの跡が見られる。

高台付塊Ⅱ類—1 (69～73) 器体の体部は、外底部から直線気味に立ち上がり広く開く。高台は高く、外反ぎみに貼り付けられており、底部は平底である。いずれも外底部に回転ヘラ切り離しの跡が見られ、71の外底には墨書が認められる。73は内面黒色土器である。

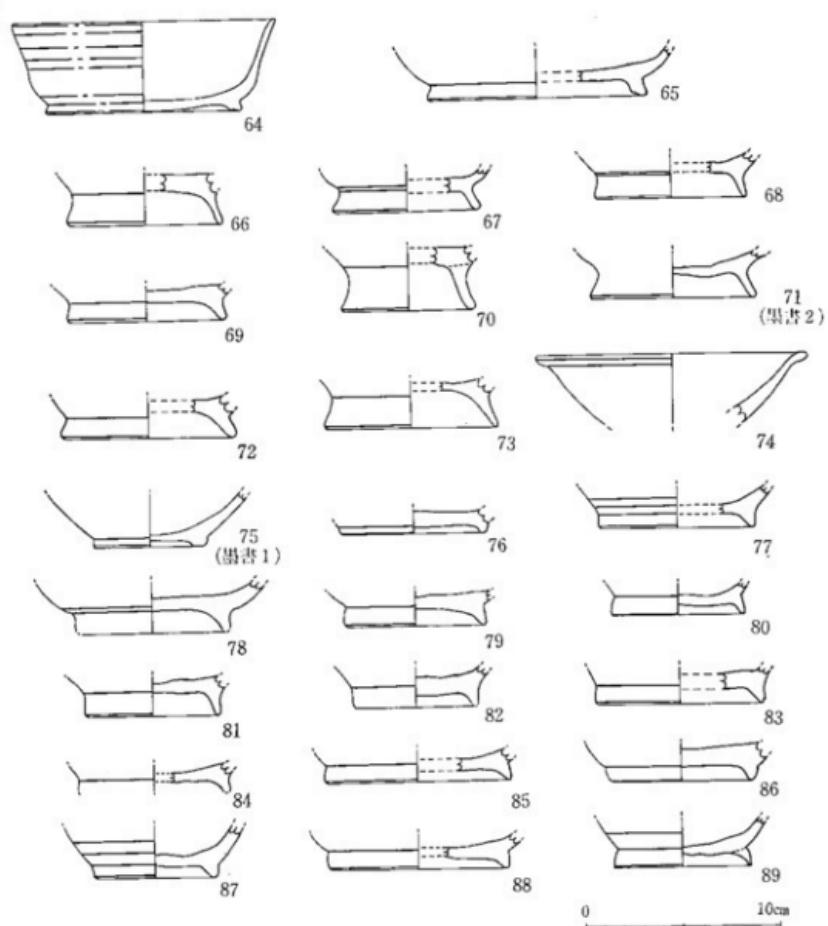
高台付塊Ⅱ類—2 (74～76) 底部は平底で、高台も低く、ほぼ垂直に貼りつけである。74の口縁部は外反し、75の外底部に墨書が認められる。74・75は内面黒色土器である。

高台付塊Ⅱ類—3 (77・78) 底部は平底である。高台は高台付塊Ⅱ類—2よりは高く、ほぼ垂直に貼り付けられている。

高台付塊Ⅱ類—4 (79～89) 底部は平底で、高台はやや丸味をもって外反ぎみに貼り付けられている。いずれも外底部に回転ヘラ切り離しの跡を残している。

(4) 高 坯

計3点の出土である。90は坯部のみの破片である。内彎ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。内部器面は研磨されている。91・92は脚部破片で、91は脚部からゆるやかに広がり裾部へ続くと考えられるが、92はほぼ垂直に下っており、丹強りである。



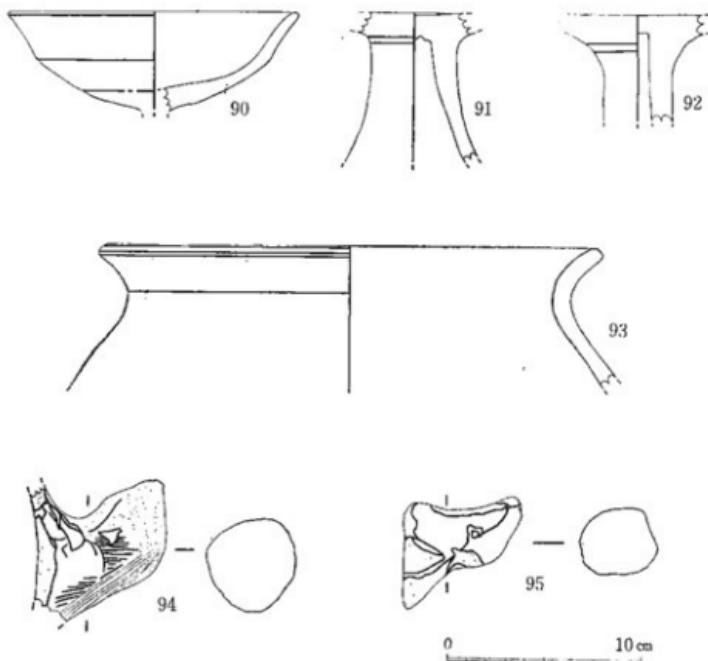
等33図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 土師器実測図(3)

(5) 壺

口径26.0cmを測る。器高は深く、胴部は張るものと考えられる。口縁部は、基部で屈曲し外反する。

(6) 把 手

計2点の出土である。94はヘラ削り後、ハケ目調整。95は指圧により調整されているが、器面の剥離が激しい。94の表面には黒色付着物がある。



「第34図」・第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 土師器実測図(4)

(7) 墨書土器

第2調査区内の西端で、3点出土している。いずれも器種は土師器の高台付塊と坏で、外底部に書かれている。尚、遺物は9世紀・平安時代のものである。

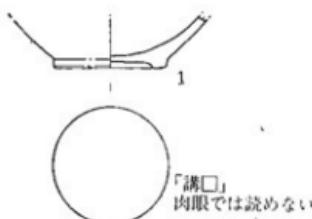
1 高台付塊

内面黒色土器である。外底部に「講口」の2文字が書かれているが、器面の剥離等で2文

字目が判読不能である。尚、墨書は肉眼では読みない。

2 高台付壺

底部が約半分残存している。外底部に「中」の一字が墨書されている。



3 壺

底部のみ残存している。回転ヘラ切りの外底部に「大寺」の二字が墨書されている。



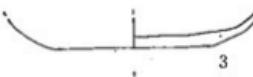
3. 須 恵 器

壺蓋・壺・盤・高台付壺・高壺・麻・壺・甕等で、いずれも破片である。6世紀中期～10世紀頃まで、いざれも^(±)破片である。



(1) 壺 蓋

壺蓋は形態的特徴より口縁部内側にかえりをもつもの…Ⅰ類、かえりをもたないもの…Ⅱ類とに分類される。



壺蓋Ⅰ類—1 (1) なだらかな天井部は、肩部で彎曲し、体部中央付近よりわずかに外反している。口縁部内側に長いかえりをもち、内器面にはヘラ記号が刻まれている。



壺蓋Ⅰ類—2 (2) Ⅰ類—1に比べて肩部の急な彎曲はなく単純にながれており、口縁部内側には短いかえりをもつ。

第35図 墨書土器実測図

壺蓋Ⅰ類—3 (3) 口縁部付近の破片である。口縁部はやや薄めで外反しており、先端は丸くおさめられ、口縁部内面に短いかえりをもつ。

壺蓋Ⅰ類—1 (4~6) 4はつまみとその周辺の天井部である。つまみは直に立ち上がり、上面は平坦であるが中央に小さな突起をもつ。5・6の口唇部は口喙状を呈し、外下方に開き6は5よりやや小型である。

壺蓋Ⅱ類—2 (7・8) 器高はⅠ類—1より低い。口唇部において7は口喙状を呈するが先端は丸みを帯び、8は口喙状を呈しておらず下外方へ開いている。

(2) 壺

壺は3点出土しているが、いずれも破片である。器体の形態的特徴は、船底型を呈し外底部より丸味をもって立ち上がるるもの…Ⅰ類、同型で直線的に立ち上がるるもの…Ⅱ類とに分けられる。

壺Ⅰ類—1 (9) 器体の体部は、底部近くで内彎しながら立ち上り、口唇部を欠く。器面はやや粗で外底部にヘラ記号が刻まれている。

壺Ⅱ類—1 (10・11) 口径14.6cm、器高3.2cmを測る。器体の体部は直線的に立ち上り、外上方に開く。外面体部と底部の境に稜が形成されている。

(3) 盆

壺より大型であるため、器種分類は盆とした。器体特徴は壺Ⅰ類—1と同じである。

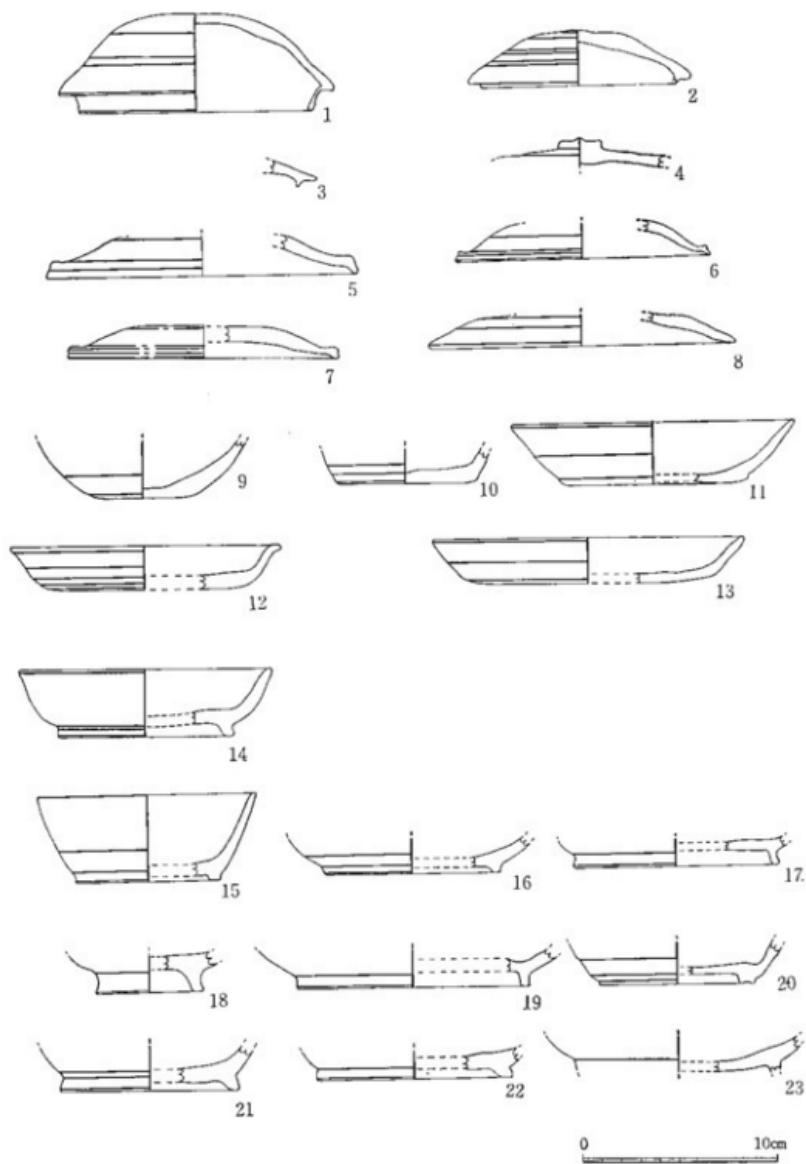
盤類—1 (12・13) 平均口径5.6cm、平均器高2.3cmを測る。12は器体の体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。13は直線的に立ち上がり開く。

(4) 高台付壺

高台付壺は10点出土しているが、いずれも破片である。器体の形態的特徴は舟型を呈し、外底部より丸味をもって立ち上がるるもの…Ⅰ類、同型で直線的に立ち上がるるもの…Ⅱ類とに分けられる。

壺Ⅰ類—1 (14) 口径13cm、器高3.4cmを測る。外面の体部下方において内彎しながら立ち上がり、口唇部は丸く治められている。高台は外傾し、その先端はやや丸味を帯びる。

壺Ⅱ類—1 (15・16) 15は口径11cm、器高4.5cmを測る。器体の体部はほぼ直線的に立ち



第36図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 須恵器実測図(1)

上がり外方に開く。高台は低く直に立っている。

塊Ⅰ類—2 (17~19) 平均高台高0.8cmを測る。高台部は外へ張り出す形を呈している。

塊Ⅱ類—3 (20) 高台高0.2cmを測る。高台部は低く、直に立っており、高台端部付近にくぼみがある。

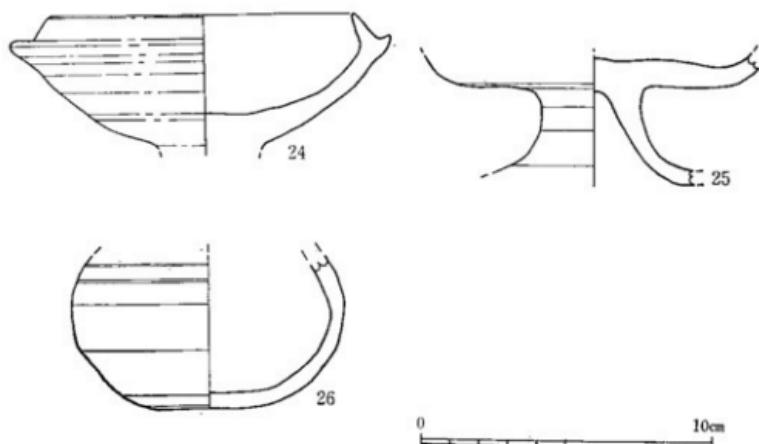
塊Ⅲ類—4 (21~23) 平均高台高0.5cmを測る。塊Ⅱ類—2と同様に高台部は丸味を持つて外へ張り出し、先端付近は丸みを帯びている。

(5) 高 坯

高坯は2点出土しているが、いずれも破片である。坯部における体部と底部の境が明瞭でないもの…Ⅰ類、明瞭なもの…Ⅱ類とに分類される。

高坯Ⅰ類 (24) 脚部を欠く。体部は坯底部より比較的単純に開いており、口唇部内側に内傾した立ちあがりをもつ。

高坯Ⅱ類 (25) 内面底部はほぼ平坦であり、不整方向のナデ調整がなされている。脚部は外に彎曲し先端近くではほぼ水平になる。



第37図 第3次肥後國分寺発掘調査出土 須恵器実測図(2)

(6) 頸 (26)

頸は1点出土した。口頸部を欠いており、体部は上下にややつぶれた球状を呈す。底部は平底で、体部との境は明瞭ではない。

(7) 壺 (27~30)

壺は底部破片2点、口頸部破片2点の計4点が出土した。27・28の体部は、ほぼ直線的に立ち上がり外に開く。底部はいずれも平底で、27は高台付である。29は肩部が内彎し、頸部は直線的に立ち上がり外に開く。30は頸部と肩部の境が明瞭ではなく、肩部は内彎し、口頸部は外反している。

(8) 瓢 (31~38)

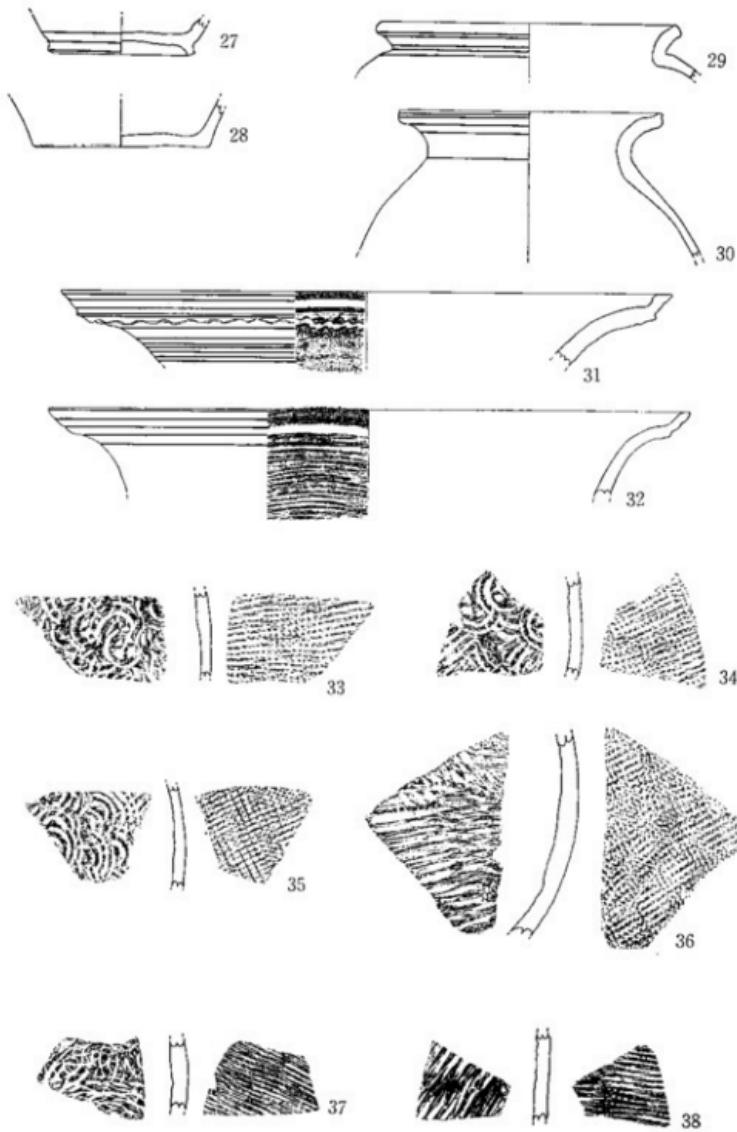
31・32は広口瓢の口縁部破片で、共に口径42cmを測る。33~38は胴部付近の破片である。31・32の頸部は大きく外反して立ち上がり、口縁端部付近で屈曲し外上方に開く。外器面には数本の条線が入っており、31には深い波形文が刻まれている。33・34の外面は平行叩きの上から格子目叩きがなされており、内面は車輪文である。35の外面は格子目叩き、内面は青海波文である。36の外面は格子目叩き、内面は平行叩きである。37の外面は格子目叩き、内面は青海波文である。38の外面は平行叩きの上から部分的に格子目叩き、内面は平行叩きである。

4. 青 磁

青磁碗である。1は龍泉窯の鏡蓮弁文碗片である。2は蓮弁文、3は無文である。

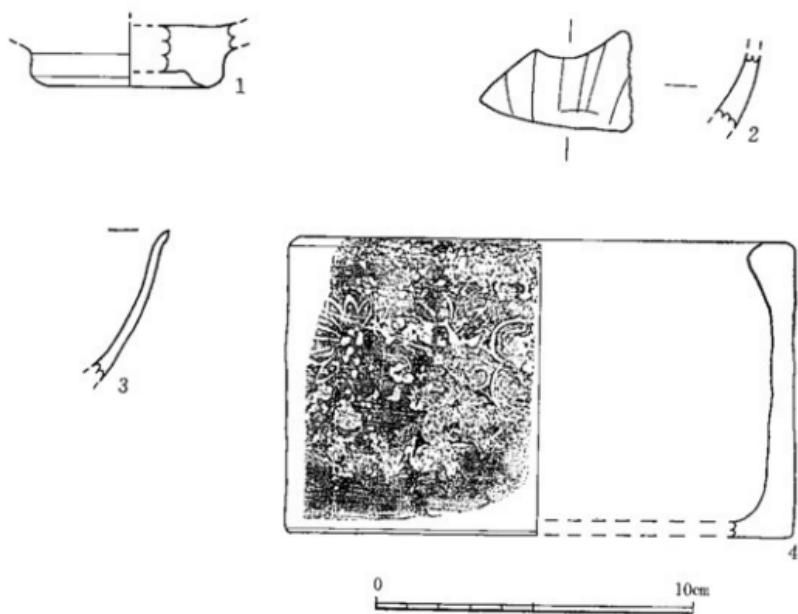
5. 瓦質土器

口径16.0cm、器高9.0cmを測る。体部は底部より直に立ち上がり、口唇部は丸みを帯びている。黒色の外器面には菊花状の文様が刻まれており、火鉢と思われる。



第38図 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 須恵器実測図(3)

0 10cm



第39図 第3次肥後国分僧寺発掘調査出土 青磁・瓦質土器実測図

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
1	F-14区	土師	坏	口 径13.3cm 器 高 3.2cm 底部径 9.6cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整
2	道路敷 溝Vの上擾 乱	土師	坏	口 径13.0cm 器 高 2.3cm 底部径 7.0cm	密	良好	内外共に橙 色	・内外器面が荒れていて 調整不明
3	道路敷 溝V南側擾 乱	土師	坏	口 径12.8cm 器 高 2.7cm 底部径 8.2cm	5mm四方の 小石1個混 入、他は密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部はヘラ切りと思 われる
4	道路敷 溝V内	土師	坏	底部径 8.0cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
5	旧三島宅 トレンチ第 2層	土師	坏	底部径 9.4cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り 跡明瞭に残る
6	溝V内 F-15区	土師	坏	底部径 8.0cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り で墨書きあり「大寺」
7	西本宅(新) 南側擾乱	土師	坏	底部径10.2cm	密	良好	内外共に橙 色	・外底部は回転ヘラ切り
8	美崎宅 南北トレン チ内	土師	坏	底部径 6.8cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切りと思 われる
9	西本宅(新) 南側擾乱	土師	坏	底部径 6.2cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
10	溝Vの上擾 乱	土師	坏	底部径 8.8cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
11	道路敷 溝V南側擾 乱	土師	坏	底部径 7.4cm	密	良好	(丹塗り)	・外底部はヘラ調整
12	道路西本宅 敷地	土師	坏	底部径 9.5cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
13	溝V内 F-15区	土師	坏	底部径 5.6cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
14	溝Ⅳ内 F-15区	土師	杯	底部径 7.0cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
15	溝Ⅱ内	土師	杯	底部径 6.0cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部はナデ調整をしている
16	道路敷 溝Ⅳ内	土師	杯	底部径 7.6cm	密	良好	橙色	・外底部は回転ヘラ切り ・手法不明
17	道路敷 溝Ⅳ内	土師	杯	底部径 7.0cm	密	良好	内一にぶい 黄褐色 外一にぶい 黄褐色	・外底部は回転ヘラ切り ・手法不明
18	道路敷 溝Ⅳ内	土師	杯	底部径 5.0cm	密	良好	内外共に にぶい橙色	・外底部は回転ヘラ切り でヘラドメ跡あり、外 底部からの立ち上り部 分は丸い ・内外共に横ナデ調整
19	溝Ⅳ南側擾 乱	土師	杯	底部径 6.6cm	密	良好	内一黒色 外一橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・黒色土器A
20	道路敷 溝Ⅳ内	土師	杯	底部径 6.0cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
21	道路敷 溝Ⅳの上擾 乱	土師	杯	口径 13.0cm 底部径 6.4cm	密	良好	内外共に橙 色	・外底部はヘラ切り ・底部は肉厚である ・外器面は横ナデ調整
22	溝Ⅳ 南側擾乱	土師	杯	底部径 5.8cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
23	美崎宅 南北トレン チ内	土師	杯	底部径 6.0cm	密	良好	浅黄色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り 後、ヘラ調整
24	道路敷 溝Ⅳ内	土師	杯	底部径 5.2cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り と思われる
25	道路敷 溝Ⅳの上擾 乱	土師	杯	底部径 8.0cm	密	良好	浅黄色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
26	溝Ⅳ内 F-15区	土師	杯	底部径 7.0cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
27	美崎宅敷地 南北トレンチ内	土師	坏	底部径 6.8cm	密	良好	にぶい黄澄色	・外底部は回転ヘラ切り ・手法不明
28	溝Ⅰ 混合土内	土師	坏	底部径 6.0cm	密	良好	橙色	・内外共に底部は横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
29	道路敷 溝壁の上擾乱	土師	坏	底部径 6.8cm	密	良好	橙色	・外底部は回転ヘラ切り ・手法不明 (器面が荒れている)
30	道路敷 溝壁内	土師	坏	底部径 7.0cm	密	良好	浅黄色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
31	西本宅 南側擾乱	土師	坏	底部径 7.0cm	密	良好	浅黄橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・板目圧痕あり
32	道路敷 埋土内	土師	坏	底部径 8.4cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
33	溝Ⅰ内	土師	坏	口径 13.2cm 器高 3.5cm 底部径 10.0cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
34	F-14区 pit内	土師	坏	口径 12.2cm 器高 3.0cm 底部径 9.0cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部に板目圧痕 回転糸切り
35	溝Ⅰ内 D-13区	土師	坏	口径 12.4cm 器高 2.7cm 底部径 10.0cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転糸切り
36	溝Ⅱ南側斜面 D-10区	土師	坏	底部径 5.5cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
37	溝Ⅴ内 F-15区	土師	坏	底部径 7.5cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転糸切り
38	道路敷 溝壁内	土師	坏	底部径 8.0cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
39	道路敷 溝壁の上擾乱	土師	坏	底部径 9.2cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
40	道路敷 溝Ⅵの上擾乱	土師	杯	底部径 8.2cm	密	良好	浅黄橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
41	西本宅裏 表採	土師	杯	底部径 8.5cm	密	良好	にぶい橙色	・外底部は糸切り、器面が荒れている ・手法不明
42	道路敷 溝Ⅶの内	土師	杯	底部径 8.6cm	密	良好	浅黄橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
43	西本宅(新) 攢乱内	土師	杯	底部径 7.4cm	密	良好	内外共に橙色	・外底部は糸切り ・内底部に黒色の付着物あり
44	溝Ⅷ内 F-15区	土師	杯	底部径 10.0cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転糸切り
45	溝Ⅸ内 F-15区	土師	杯	底部径 7.0cm	密	良好	橙色	・内底部は横ナデ調整 ・外底部は糸切り
46	溝Ⅹ内 F-15区	土師	杯	底部径 8.0cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転糸切り
47	西本宅 南側擾乱	土師	杯	底部径 6.2cm	密	良好	浅黄橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
48	道路敷 溝Ⅺ南側擾乱	土師	皿	口 径 11.8cm 器 高 1.6cm 底 部 径 8.0cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
49	溝Ⅻ混合土 内	土師	皿	底部径 16.0cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整
50	道路敷 溝Ⅻ内	土師	皿	底部径 7.8cm	密	良好	内外共に丹塗り	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
51	溝Ⅼ内 D-13区	土師	皿	口 径 9.1cm 器 高 0.9cm 底 部 径 6.5cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転糸切り

番号	出土遺構	種類	器 種	法 量	胎 土	焼成	色 調	特 殊
52	G-14区 pit内	土師	皿	口 径 8.4cm 器 高 1.4cm 底部径 7.2cm	密	良好	淡橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転糸切りで その上に板目圧痕あり
53	溝V内 D-13区	土師	皿	口 径 10.3cm 器 高 1.6cm 底部径 9.1cm	密	良好	浅黄橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
54	溝II南側斜面 D-10区	土師	皿	口 径 10.1cm 器 高 1.7cm 底部径 9.1cm	密	良好	浅黄橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部に板目圧痕あり
55	道路敷 溝内	土師	皿	口 径 8.2cm 器 高 1.4cm 底部径 6.6cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
56	溝内	土師	皿	口 径 7.8cm 器 高 1.1cm 底部径 6.6cm	密	良好	明赤褐色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切りである ・内外面共器面が荒れて いる
57	溝III南側 表 採	土師	皿	口 径 8.6cm 器 高 1.5cm 底部径 7.4cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
58	溝V内 F-15区	土師	皿	口 径 8.2cm 器 高 1.2cm 底部径 6.4cm	密	良好	橙 色	・内底部はナデ調整 ・外底部は糸切りでナデ 調整
59	H-15区 pit内	土師	皿	口 径 8.8cm 器 高 1.2cm 底部径 8.1cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
60	溝II南側斜面 D-10区	土師	皿	口 径 7.2cm 器 高 1.5cm 底部径 6.0cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は糸切り
61	F-14区 pit内	土師	皿	口 径 8.8cm 器 高 1.3cm 底部径 8.0cm	密	良好	淡橙色	・内一横ナデ調整 ・外一ナデ調整 ・外底部は回転糸切り
62	溝V内 D-13区	土師	皿	口 径 17.5cm 器 高 2.5cm 底部径 14.0cm	密	良好	浅黄橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転糸切り
63	溝V内 F-15区	土師	皿	口 径 6.6cm 器 高 2.1cm 底部径 5.0cm	密	良好	橙 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転糸切り

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
64	溝Ⅱ内 暗褐色埋土 内	土師	高台付 壺	口径13.6cm 器高4.8cm 高台口径 10.0cm 高台 高0.2cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部に高台貼り付け
65	道路下溝Ⅰ 内 混合土内	土師	高台付 壺	高台口径 11.0cm 高台 高0.9cm	密	良好	にぶい橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部に高台貼り付け
66	道路敷 溝Ⅲ南側擾乱	土師	高台付 壺	高台口径 8.0cm 高台 高1.8cm	密	良好	浅黄褐色	・外底部は回転ヘラ切り と思われる ・高台貼り付け ・手法不明
67	西本宅裏 表採	土師	高台付 壺	高台口径 7.8cm 高台 高1.0cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台貼り付け
68	道路敷 溝Ⅳ内	土師	高台付 壺	高台口径 7.8cm 高台 高1.4cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台貼り付け
69	道路敷 溝Ⅴ内	土師	高台付 壺	高台口径 8.2cm 高台 高0.9cm	密	良好	橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台は貼り付け
70	道路敷 溝Ⅵ内	土師	高台付 壺	高台口径 7.0cm	密	良好	橙色	・外底部は回転ヘラ切り ・外表面が荒れている ・手法不明
71	道路敷 溝Ⅶ内	土師	高台付 壺	高台口径 8.5cm 高台 高1.2cm	密	良好	内外共に にぶい橙色	・外底部は回転ヘラ切り の後、高台貼り付け ・外底部に「中」の墨書 あり ・内外共に横ナデ調整
72	西本宅 西側擾乱	土師	高台付 壺	高台口径 9.0cm 高台 高1.2cm	密	良好	浅黄褐色	・外底部は回転ヘラ切り と思われる ・外面に黒色付着物あり ・手法不明
73	美崎宅 南北トレンチ内	土師	高台付 壺	高台口径 9.2cm 高台 高1.8cm	密	良好	外一浅黄褐色 内一黒色	・外底部は回転ヘラ切り と思われる ・手法不明 ・黒色土器A
74	溝Ⅷ内	土師	高台付 壺	口径14.0cm	密	良好	内一黒色 外一橙色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・黒色土器A
75	C-13区	土師	高台付 壺	高台口径 8.0cm 高台 高0.3cm	密	良好	内一黒色 外一にぶい 黄褐色	・外底部は回転ヘラ切り で墨書き「講口」 ・高台は貼り付け
76	溝Ⅸ内 F-15区	土師	高台付 壺	高台口径 7.4cm 高台 高0.3cm	密	良好	浅黄褐色	・内底部はナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
77	道路敷 溝の上擾乱	土師	高台付 塊	高台口径 8.2cm 高台 高0.6cm	密	良好	浅黄褐色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
78	道路敷 溝内	土師	高台付 塊	高台口径 8.0cm	密	良好	浅黄褐色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台は貼り付け
79	西本宅裏 表 採	土師	高台付 塊	高台口径 7.4cm 高台 高0.9cm	密	良好	浅黄褐色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台は貼り付け
80	西本宅(新) 防空壕南	土師	高台付 塊	高台口径 7.0cm 2mm程の小 砂少々混入 高台 高0.5cm	粗 良好		浅黄褐色	・外底部は回転ヘラ切り と思われる ・内底部に水しきの跡あり ・高台は貼り付け
81	溝口 南側擾乱	土師	高台付 塊	高台口径 7.0cm 高台 高1.2cm	密	良好	浅黄褐色	・外底部は回転ヘラ切り ・高台は貼り付け ・手法不明
82	道路敷 溝内	土師	高台付 塊		密	良好	橙 色	・内底部ナデ、外底部と 外表面横ナデ調整 ・外底部は、回転ヘラ切り と思われる ・高台は貼り付け
83	防空壕上	土師	高台付 塊	高台口径 8.6cm 高台 高0.7cm	密	良好	浅黄褐色	・外底部は回転ヘラ切り ・内外共に横ナデ調整 ・内底部にナデ調整あり ・高台は貼り付け
84	道路敷 溝の上擾乱	土師	高台付 塊	高台口径 7.8cm	密	良好	橙 色	・内面横ナデ調整 ・外表面が荒れている ・高台は貼り付け
85	道路敷 溝の上擾乱	土師	高台付 塊	高台口径 8.8cm 高台 高0.5cm	密	良好	浅黄褐色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台は貼り付け
86	道路敷 溝口(肥ツ ボ) 横擾乱	土師	高台付 塊	高台口径 7.4cm 高台 高0.7cm	密	良好	浅黄褐色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り と思われる ・高台は貼り付け
87	並崎宅 南北トレン チ内	土師	高台付 塊	高台口径 6.4cm 高台 高0.6cm	密	良好	浅黄褐色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台は貼り付け部に一 条の小さなヒビがある
88	道路敷 溝の上擾 乱	土師	高台付 塊	高台口径 9.4cm 高台 高0.6cm	密	良好	浅黄褐色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台は貼り付け
89	並崎宅 南北トレン チ内	土師	高台付 塊	高台口径 7.0cm 高台 高1.7cm	密	良好	内外共に橙 色	・外底部は回転ヘラ切り で削りの跡が明瞭に残 る ・高台は貼り付け ・内外共に横ナデ調整

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
90	E-12区 竪穴遺構	土師	高坏 脚部	口径15.0cm	密	良好	浅黄橙色	<ul style="list-style-type: none"> ・外面一口頭部はナデ調整、頭部から肩部にかけてヘラ削り ・内面—横ナデ調整
91	旧林田宅 石垣南立木付近 表土層内	土師	高坏 脚部		やせ密	良好	橙色	<ul style="list-style-type: none"> ・外面—縱方向へのヘラ削りで、その上からナデしている ・内面—ヘラ削り 黒色付着物あり
92	溝V内 E-15区	土師	高坏 脚部		密	良好	橙色 (丹塗り)	<ul style="list-style-type: none"> ・身込み部分と、脚体の外側は横ナデ調整
93	溝I 混合土内	土師	壺	口径26.0cm	密	良好	にがい橙色	<p>内面一口頭部は横ナデ調整、肩部はハケ目の上からヘラ削り</p> <p>外面一口縁部から肩部にかけてハケ目であり、口頭部はその上から横ナデ調整</p>
94	溝V内 F-15区	土師	把手		密	良好	橙色	<ul style="list-style-type: none"> ・上部はナデ調整 ・下部はハケ目があり黒色の付着物がある
95	溝V内 F-15区	土師	把手		密	良好	橙色	・表面が剝離破損している

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
1	E-12区 堅穴造構	須恵	坏 蓋	口 径14.1cm 器 高 4.1cm	密	良好	灰白色	・内面一ナデ調整 ヘラ記号あり ・外側一上部はヘラ削り 中央付近より口縁部 までは横ナデ調整
2	満V内 F-15区	須恵	坏 蓋	口 径11.4cm 器 高 2.9cm	密	良好	灰 色	・内外共に横ナデ調整 ・外面はヘラ削り跡があり、部分的に自然釉がかかっている ・内面に黒色付着物あり ・外側につまみがとれたと思われる跡あり
3	満V内 F-15区	須恵	坏 蓋		密	良好	灰白色	・内外共に横ナデ調整
4	西本宅裏 表採	須恵	坏 蓋		密	良好	青灰色	・つまみの接点部に一条のヒビあり ・器面にロクロびきの跡あり
5	道路敷 満塗(肥ダ メ)横	須恵	坏 蓋	口 径16.2cm	密	良好	表一にぶい 褐色 裏一浅黃褐色	・内外共にロクロびき跡 あり
6	道路敷 満塗内	須恵	坏 蓋	口 径13.2cm	密 器表面に白い小砂がついている	良好	にぶい赤褐色	・外器面にロクロびきの 跡あり
7	D-13区 pit内	須恵	坏 蓋	口 径14.0cm 器 高 1.7cm	密	良好	褐灰色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
8	西本宅裏 表採	須恵	坏 蓋	口 径15.8cm	密	良好	青灰色	・内外共に横ナデ調整
9	旧林田宅 解体後表採	須恵	坏	底部径 4.4cm	粗 1mm前後の 小砂多く混入	普	灰白色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・外底部にヘラ記号あり
10	道路敷 (西本宅)	須恵	坏	口 径14.6cm 器 高 3.2cm 底部径 9.6cm	密	良好	灰白色	・内外共に横ナデ調整 ・内底部にナデあり ・外底部は回転ヘラ切り
11	満V内 F-15区	須恵	坏	底部径 7.0cm	密	良好	灰白色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
12	満V内 F-15区	須恵	盤	口 径14.0cm 器 高 2.2cm 底部径10.0cm	密	良好	灰 色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
13	旧杉本宅敷地 (道路敷下) 溝Ⅰ内	須恵	盤	口径16.0cm 器高2.3cm 底部径12.8cm	密	良好	青灰色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部はヘラ切りと思われる
14	溝Ⅰ内 E-10区	須恵	高台付 塊	口径13.0cm 器高3.5cm 高台口径9.0cm	密	良好	灰白色	・内面は横ナデ調整 ・高台は貼り付けで、貼り付け部分の外面にヒビが見られる
15	F-14区	須恵	高台付 塊	口径11.2cm 器高4.4cm 高台口径7.4cm	密	良好	灰白色	・内外共に横ナデ調整 ・高台は貼り付けであり、貼り付け部分の内面にキ裂がある
16	西本宅 表採	須恵	高台付 塊	高台口径9.2cm	密	良好	灰白色	・内外共に横ナデ調整 ・高台は貼り付け
17	道路敷 溝Ⅱの上擾乱	須恵	高台付 塊	高台口径10.8cm	密	良好	にぶい褐色	・外底部は回転ヘラ切りと思われる ・手法不明
18	道路敷 溝Ⅱ(肥ツボ)横搅乱	須恵	高台付 塊	高台口径5.6cm	密	良好	褐灰色	・内外共に横ナデ調整
19	溝Ⅰ内	須恵	高台付 塊	高台口径12.0cm	密	良好	青灰色	・内外共に横ナデ調整
20	溝Ⅳ 南側擾乱	須恵	高台付 塊	高台口径10.2cm	密	良好	青灰色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台は、貼り付け
21	道路下溝Ⅰ 混合土内	須恵	高台付 塊	高台口径9.0cm	密	良好	灰色	・内一機ナデ調整 ・外一ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
22	美崎宅敷地 南北トレンチ内	須恵	高台付 塊	高台口径10.2cm	密	良好	灰白色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り ・高台は貼り付け
23	溝Ⅴ内 F-15区	須恵	高台付 塊	底部径10.7cm	密	良好	灰色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
24	溝Ⅲ内 竪穴遺構	須恵	高杯	口径13.0cm	密	良好	灰色	・内外共に横ナデ調整 (脚部なし)
25	溝Ⅳ内	須恵	高杯		密	良好	灰色	・内外共に、横ナデ調整 ・内底部は、静止不整方 向のナデ調整
26	竪穴遺構	須恵	ハツク 碗	底部径 4.3cm	密	良好	灰色 (黒色の自 然釉)	・内外共にナデ調整 ・外底部は回転ヘラ切り
27	道路敷 溝Ⅴ内	須恵	壺	高台口径 10.0cm 高台 高0.9cm	密	良好	青灰色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部に板目压痕あり ・外底部はヘラ切りと思 われる
28	道路敷 (西本宅)	須恵	壺	底部径12.0cm	密	良好	褐灰色	・内外共に横ナデ調整 ・外底部は板目压痕あり ・内底部にはナデあり
29	溝Ⅴ内 F-15区	須恵	壺	口径20.0cm	密	良好	灰色	・内面口頸部と、外面頸 部は横ナデ調整 ・頸部外面は格子目タタ キ
30	旧林田宅 石垣南 立木付近	須恵	壺	口径18.0cm	密	良好	内一赤褐色 外一褐灰色	・外一肩部から頸部にか けてタタキ、その上からカキ目 ・内一肩部から頸部にか けて青海波文タタキ、その上から横 ナデ調整 ・内外共、口頸部は横ナ デの跡あり
31	溝Ⅵ内 F-15区	須恵	広口壺	口径42.0cm	密	良好	灰色	・内外共に横ナデ調整の 跡あり ・外面頸部に刻文あり ・器面に黒灰色の色変が 部分的に付着している
32	道路敷 溝Ⅶ擾乱	須恵	広口壺	口径42.0cm	密	良好	外一褐色 内一白斑点 褐色	・外面一頸部は横ナデ、 肩部にかけては平行タタキが入 っている ・内面一肩部に同心円波 文あり ・頸部より上は横 ナデ調整
33	溝Ⅷ 南側擾乱	須恵	要胴部		密	良好	明褐灰色	・外面一平行タタキの後 格子目タタキ ・内面一車輪文タタキ
34	西本宅 防空壕	須恵	要胴部		密	良好	外一灰白色 内一灰色	・外面一平行タタキの後 格子目タタキ ・内面一車輪文タタキ

番号	出土遺構	種類	器 種	法 量	胎 土	焼成	色 調	特 微
35	道路敷 埋土内	須恵	甕胴部		密	良好	褐色	・外面—格子目タタキ ・内面—青海波文タタキ
36	防空壕上	須恵	甕胴部		密	良好	外—暗赤褐色 (自然釉 らしきもの あり) 内—灰色	・外面—格子目タタキ ・内面—平行タタキ
37	溝Ⅲの上擾 乱	須恵	甕胴部		密	良好	外—褐色 内—灰 色	・外面—平行タタキ ・内面—青海波文タタキ
38	溝Ⅳ 南側擾乱	須恵	甕胴部		密	良好	褐色	・外面—平行タタキの後 一部格子目タタ キあり ・内面—平行タタキ

番号	出土遺構	種類	器 種	法 量	胎 土	焼成	色 調	特 微
1	溝Ⅱ内 D-13区	青磁	高台付 碗	高台口径 5.0cm	密	良好	薄綠灰色 (釉)	・外底部は露胎のままで ・錦運弁文あり
2	溝Ⅱ内 2 層	青磁	高台付 碗		密	良好	薄緑色(釉)	・蓮弁文あり
3	溝V内 E-15区	青磁	高台付 碗		緻密	良好	明緑灰色	・無 文
4	溝I内 混合土内	瓦質		底部径16.0cm	密	良好	黒 色	・内面—横ナデ調整 ・外面—ナデ調整 ・外器面中央付近に刻文 あり

註

(1) 大田博幸也「肥後國分僧寺跡」熊本県教育委員会

(2) 福岡県立九州歴史資料館森田勉氏の御教示による。

大田博幸也「肥後國分僧寺跡」熊本県教育委員会

橋本康夫也「上鶴頭遺跡」熊本県教育委員会

熊本県文化課技師松本健郎氏の御教示による。

第V章 まとめ

本年度調査地の大部分は、松本雅明氏推定の肥後國分僧寺寺域内の北東部にあたる。調査にあたっては、寺域を示す築地跡や溝等の遺構の存在が考えられたが、調査の結果、鎌倉時代頃の溝が3本、近世の溝6本、近世の墓塚2基、時期不明の竪穴遺構1基が確認されたのみで、直接國分僧寺に関係する遺構は検出されなかった。更には、調査地内の大部分が戦前・戦後の開発の波を受けており、遺構の残りも悪く検出はむつかしかった。

中世の溝が検出された第2調査区の南端付近は、建物遺構が検出された昭和57年度・第2次発掘調査地に隣接し、布目瓦を始めとして、6世紀から14世紀頃の土師器・須恵器片、13世紀頃の青磁(龍泉窯)片等が出土している。この内には、平安時代前期頃の土師器壺及び高台付壺の外底部に「講口」・「中」・「大寺」と書かれた3点の墨書き器が含まれており、いずれも國分僧寺を示す貴重な遺物である。

本年度の調査でも、約4.2tの布目瓦片が出土しているが、その大部分は丸瓦・平瓦の破片であり、文様のある瓦は少なくいざれも小破片である。創建期のものとされている複弁8弁軒丸瓦や、均正唐草文軒平瓦などを含む軒丸瓦3種、軒平瓦3種が確認されたが、これらは全て昭和56年度第1次調査の際出土した瓦と同種であった。

この他、弥生時代の土器片や中世の火舎等の遺物が、近世陶磁器に混って出土している。

最後に、肥後國分僧寺跡一帯は、戦後急速に発達した市街地である。このため諸々の問題があり、発掘調査もスムーズに進まず、調査地区が変わる度に問題が起り、その都度頭を下げるまわる毎日であった。しかし、その中にあって積極的に調査に協力される方もあり、市街地の発掘調査の難しさを味わった8ヶ月間であった。

付 論

国分寺跡出土人骨

産業医科大学第1解剖学教授

北條暉幸

本研究は、熊本県文化課から依頼された。対象は、国分寺跡出土の1体の人骨で、江戸時代後期～明治期の人骨と推定されたものである。

本人骨は、土塗中に体の右側を下にした横臥屈膝であった。両膝を腹の前まで曲げ、上腕部は前上方に上げた姿勢である。

人骨はもなく、全体として保存が悪い。

頭部についてみると、右側の前額部が残存しており、眉間の高まりが極めて強い。右側の後頭骨が残存しており、外後頭隆起が大きく高まっている。上項線も強い。

下顎骨の骨体の右側も正中部にかけて残存しており、大きく隆起したオトガイ隆起とこれに続く隆起（下顎骨下縁にある下骨体隆起）は、11mmの高さで長さ約25mm後方に延びてオトガイ孔のはば直下に達する。極めて著明な隆起である。この著明な下骨体隆起の上には、隆起に沿って後方に走る深い溝が形成されており、このため下顎骨の下縁は前方に突出して、『めくれた』ように見える。

このように、強く張り出した眉間隆起と外後頭隆起、さらに強く隆起したオトガイ隆起および下顎骨の特筆に値する下骨体隆起とその直上の深い溝から、本例は筋肉の発達した男性人骨と推定される。

さらに、本例の右側上顎犬歯は大きく、この点も男性の推定を強める。

右側上顎大臼歯の咬合面の磨耗（咬耗）は著しく、左側の第1、第2、第3大臼歯の磨耗も著しい。これらの大臼歯の咬耗は著しいため、咬頭が認められぬ程である。

矢状縫合の一部が残存しており、その内板（頭蓋骨の内側面）は癒合しており、外板の癒合は弱いが認められる。

このように、大臼歯の磨耗の著しいこと、矢状縫合の癒合の程度からみて、本例は、熟年、40代に達しているものと推定される。

なお、上肢、下肢の骨格の保存は極めて悪く、その原形をわずかにとどめるに過ぎない。そのため、上腕骨、大腿骨、脛骨などの長さを計測することは不可能で、本例の身長推定はできなかった。

図 版



(南側より)



(発掘調査地)

図版 1 肥後国分寺 上空写真



146番地（東壁）



147番地（南壁）

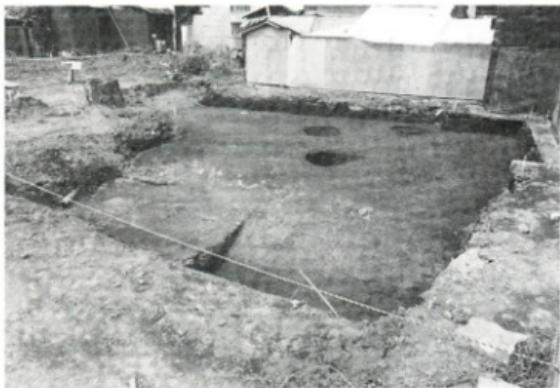


148番地（東壁）

図版2 第3次肥後國分僧寺発掘調査第1調査区 土層写真



320番地（南より）



327番地（南より）



313・314・315番地

図版3 第3次肥後国分寺発掘調査第2・第3調査区



溝Ⅰ（東壁面）



溝Ⅱ（東壁面）



溝Ⅰ・Ⅱ（西壁面）

図版4 第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区溝Ⅰ、Ⅱ土層写真



図版5 第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区（1）



図版6 第3次肥後国分僧寺発掘調査第2調査区（2）



溝V（東より）



溝VI（西より）



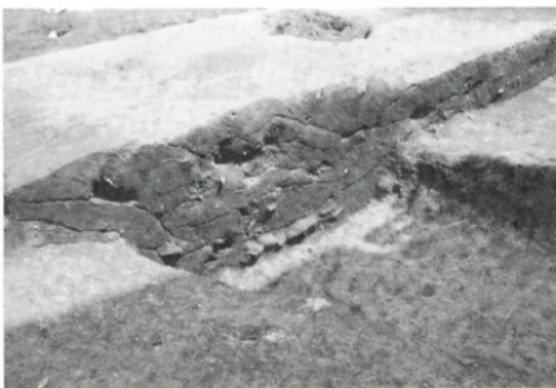
溝V・VI・VII（南より）



溝V



溝Ⅵ

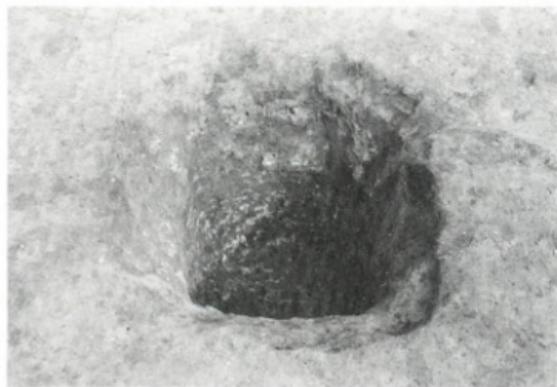


溝Ⅶ

図版8 第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区溝V・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ土層写真



近世墓

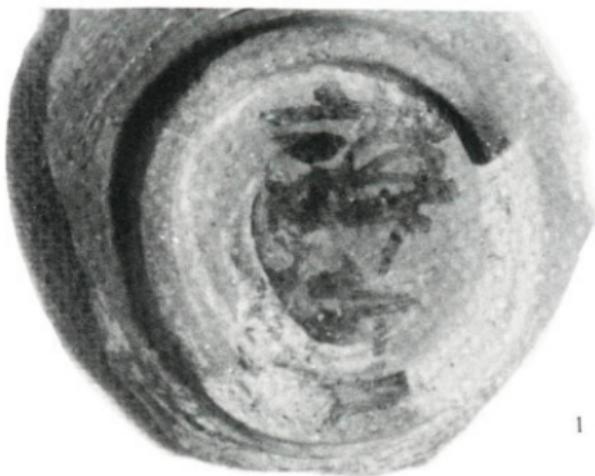


土 塚

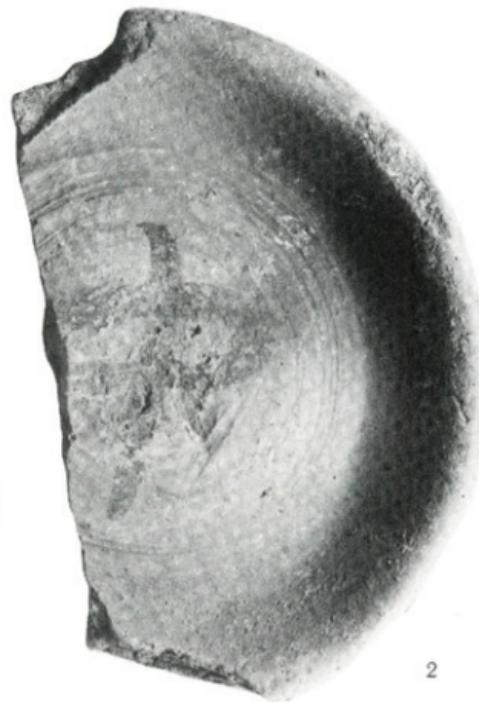


豎 穴

図版9 第3次肥後國分僧寺発掘調査第2調査区検出遺構



1



2



3

図版10 墨書き土器



平瓦-3



熨斗瓦



面戸瓦



丸瓦-（2）

図版11 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土瓦



I類-1



I類-2



II類-1



I類-3



II類-2

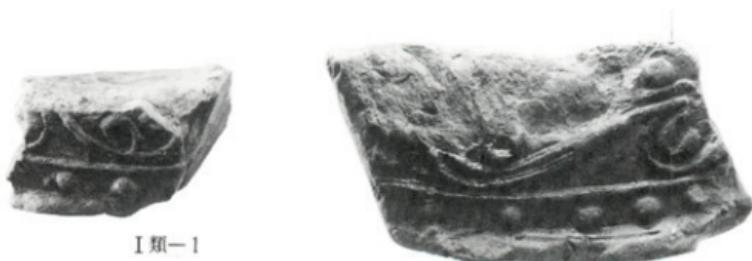


III類-1



III類-2

図版12 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土文様軒丸瓦



I類-1

I類-2



II類-1

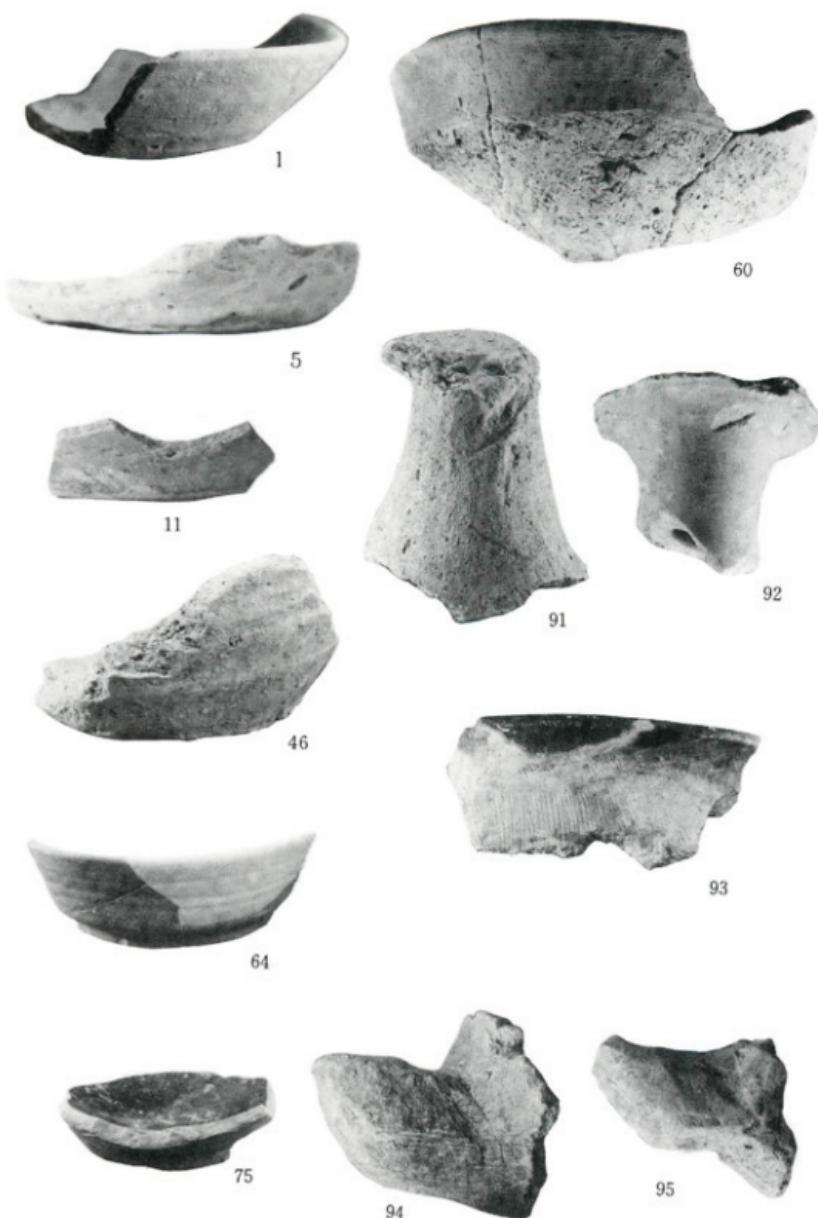


III類-1

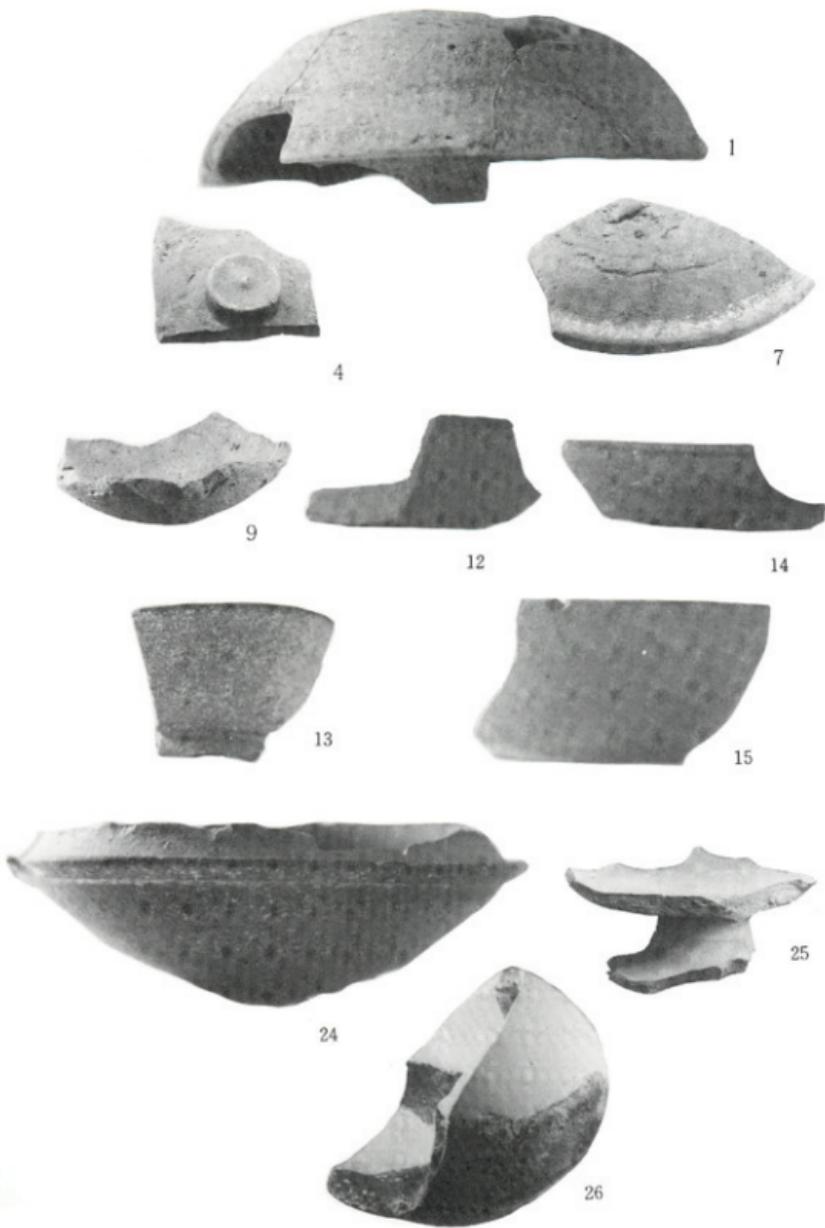


III類-2

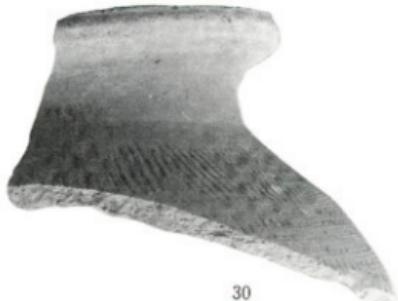
図版13 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土文様軒平瓦



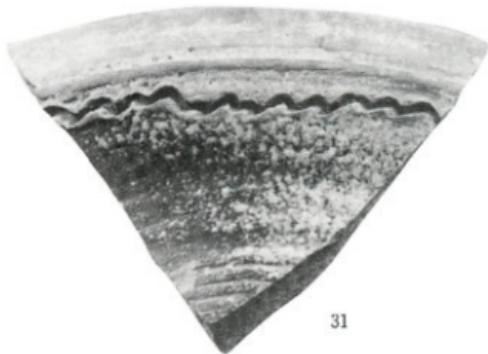
図版14 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 土器



図版15 第3次肥後國分僧寺発掘調査出土 須恵器



30



31



32



4

圖版16 等3次肥後國分僧寺發掘調査出土須恵器・瓦質土器

熊本県文化財調査報告 第67号

肥後国府僧寺跡Ⅱ

昭和59年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 株式会社秀巧社
熊本市国府4丁目10-18
TEL 366-1221

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 67 集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：肥後国分僧寺跡 2

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日